



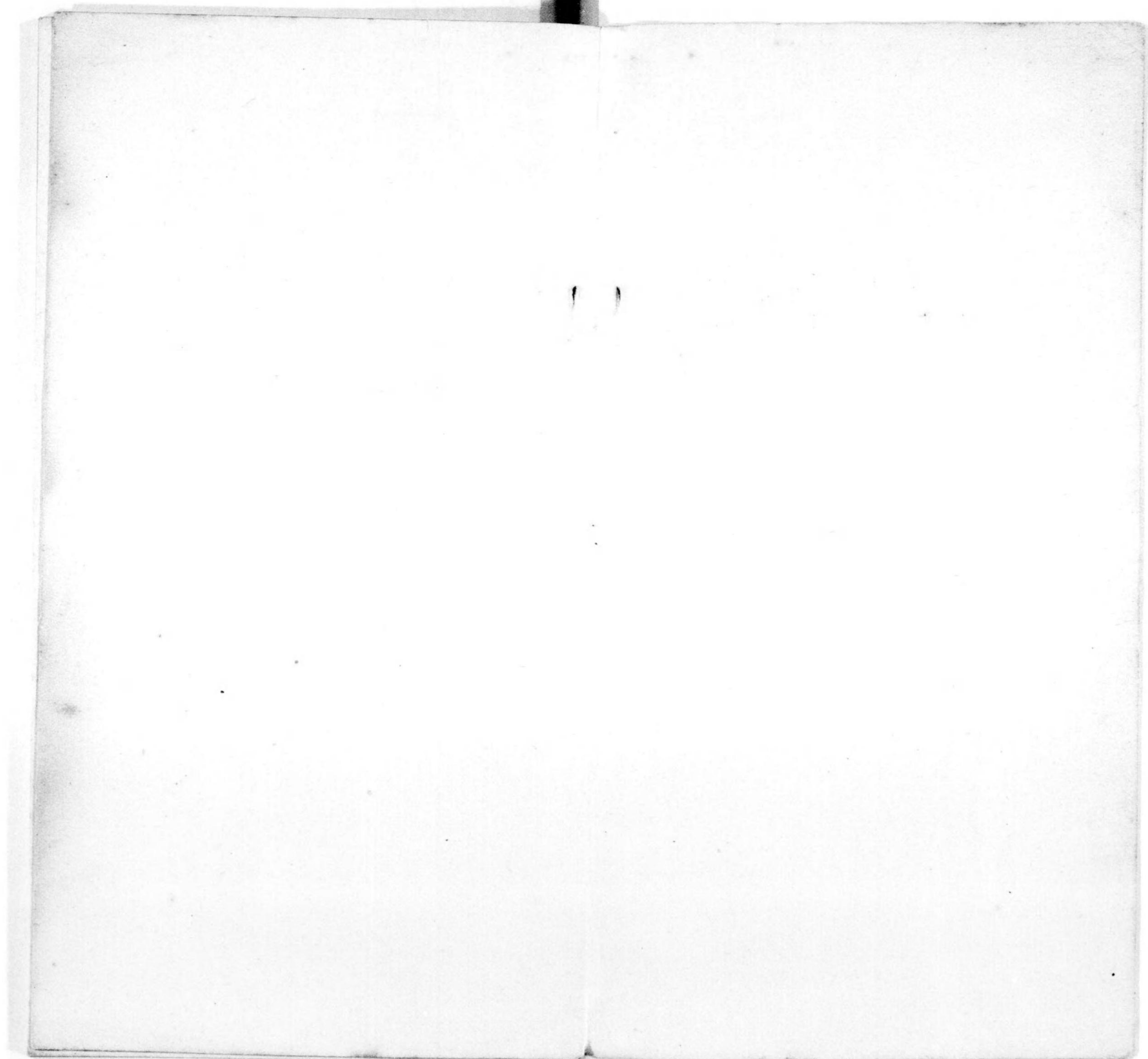
特106
252

光の墓



始







の

臺



序

辛くてとてもお上りになれますまいと言ふと、そうですかと手を出したが、六ヶ敷でお解りになりますまいと言ふと、私にも一寸と見たがる。これは御目に懸けるわけには参りませんと云へば、少しは好いでせうと眼を見張り、あまり一人の人を褒めると、何とか其缺點を探したがると言ふ事は、凡そ人間の通習かも知れない。外国人にはないかも知れないけれど、日本人にはよくある。これは正しいと言ふと、どうだかと直ぐ疑ふ。これではなければならぬと言ふと、これにもそんな事は具備して居ると反對して見たくなるらしい。

然しどんな人でも問題が共通の利害に關しては、少々は無理だと思つても口を閉ぢるものである。また反對すると自分の損になるとか、名譽に關するとか

—(1)—

世界は唯一つであつても、社會は數限りなく異なつて居て、其一々に各々特有の社會觀がある。三千や八萬四千と説かれた昔の事は、扱て置いて、かゝる個々別々の主體より見た社會觀は、全く算數の限りでも盡くせず、心の計量をも極絶した無量無數の夥しさである。蚯蚓の觀察や、兔や猫の觀察ばかりでなく、馬の見た社會もあらう。牛の見た社會もあらう。植物や礦物から見た社會も、見様と考へ様では見られない事もない。器物や食物からさへも、夫々の見様がある。今はずつと範圍を狭くして、人間同志ばかりの社會として考へて見ても、勞働者側から見た社會、資本家側から見た社會、政治家の見た社會、文學者の見た社會、

拔

—(2)—

言ふ時には、言ひ度い事も言はないで了ふものである。此書は共通の利を説き、貴下の人品人格を定める試金石である。宗教と言ふと何だか變人の集りか、堅苦しい様に早合點したが、雪月花も其性命は宗教にある。宗教は人生の生命であり、日常生活の魂魄である。そして宗教は信仰が生命であり、信仰は正道を其の主眼とする。所が此正道と言ふものは、誰としても六ヶ敷いものである。やさしくすると寶が忘れられやすい。何としても讀まれる方に進んで味解して貫はねばならぬ。古聖賢は血を涸らし骨を挫き肉を裂いて、その爲めに盡されたのである。少しは緊張して讀んで貰ひたい。これを以て序とする。

大正十年二月

清 水 歸 一

理學者の見た社會、醫者の見た社會と云ふ様に、畫家の社會、藝者の社會、盜賊の社會、反逆者の社會、經濟學者の社會、乞食の社會、宗教家の社會、哲學者の社會、お百姓の社會、商人の社會、道德者の社會、教育家の社會、軍人の社會、など、それに婦人の社會、老人の社會、兒童の社會、青年の社會、狂者の社會、愚者の社會、下女下男の社會、主婦主人の社會、頭取の社會、事務員の社會、學校教授の社會、學生の社會、海員の社會、水夫の社會と見て來るといつ迄探つてよいか、到底數へ切れるものではない。唯一人の身体でさへ、幾十幾百の社會が見られるのだから、それが日本だけでさへ、ざつと七千萬人と云ふ數である一人平均十個の社會があると見ても、夫れが重複錯綜して居るのだから、随分多數な社會が見られる事になる。夫れ等の數知れぬ社會に、別に相談もなく協議も

なしに、綾に錦に織りなされて、眩ゆきばかり、美しくしい自然となつて活いて居る。そして其形成して居る主軸には各々必ずらず魂のある様に、此大自然にも靈魂がある。名前は今の所定めないが、これを見て聞いて、その性質や作用や運行などを、よく知つて居ると、確かに物事に失敗がなくなる。煩悶がなくなる。泣いても笑つても、據り所がある様になる。怒つても恨んでも迷はないで濟む、それは外ではない。此大きなものを見ればよいのである。見ればわかる。正しく見て惑はなければ、萬人が萬人、一人残らずそれが受け取れると言ふ、仲々都合のよいものである。此大きなものを聞けばよいのである。聞けばわかる。正しく聞いて迷はなければ、萬人が萬人、一人残らずそれが用えられると言ふ、實に大切なものである。驚いて逃げてても構はない。口惜しがつて怒つても宜ろしい。いくら

いやだと思つたつて、此自然の一分子を離れない限りは、如何しても彼うしても離れられないのだから致し方がない。日月燈明の光明は、いくら長くても明滅があるから一時であらう。然し此光明は、始めもなく終りもない。夜だからと思つても、此光明は輝く。人の居らない所だと思つても、また此光明はよく照らす。生れる前から死んだ後まで照らして呉れるのは、此光明だけである。そして此光明を、ちらとでも見たら最後、此人は光明臺上の人なのである。この大自然は口惜しがつて反對したり、自殺したり、自暴自棄になつたりした位で、離れる事の出来る様な、そんな小さいものではない。死んでも腐つても、離れられないのは、この大自然の棲家の中である。自然は悠久だから自然は無邊だからである。

伊豆の下田の了仙寺の住職、清水歸一師は、日脱が恩師である。去年の夏から世の人の爲めに、やさしい單行本を書けとの御仰であつた。丁度南品川の井上福子氏は、第一版の出版費用を全部出して下さると云ふ話まで進んだ。自然が書かすのである。筆は動かなくても、自然は讀む人の肺腑を抉らずには居らないだらう。話しは斯うであつたが、恩師も御多用ではあるし、貧道の私には全く書く暇も充分でなかつた。それで井上様からは催促され乍ら遂今年まで延びてしまつた。然し今年、日連上人御誕生から丁度七百年であるし、大聖釋迦の下生からは、已に二千九百五十年である。それに施者井上氏の亡夫、法泉院教篤日善居士の七年回忌に當ると言ふ。それで聖祖の誕生七百年祭に對する、報恩謝徳の記念と、

故人の菩提回向の爲めに、此淨財を喜捨される事になつたのだから、或は返つて延びてよかつたのかも知れない。

昔目犍連尊者は母の爲めに、衆僧を招いて百味の飲食を施して、一劫の餓鬼飢渴の苦を、救つた想だ、所がこれは自然に對して百味の飲食を施すのだ。功德も決して少なくてはあるまい。それを全部過去精靈に回向する。

勿論井上福子氏の名は、自然界の記録に残るであらう。大地を紙とし、大海を硯とし、一切の草木を筆とした歴史に朽ちずに、残るであらう。夫妻一時の成佛縁起できる。

大正十年一月

富士を望むる玉川の庵室にて

釋日脱誌るす

光明之臺目次

奇なる哉妙なる哉	一
宇宙の森羅萬象	一
天	一
地	五
山川草木	二
大海	一五
醒めよと鳴り渡る自然の鐘	一七
明哲なる哉、澄靜清明なる深淵の月	二五

東に迷ふ者は對當の西に迷ふ……………二八

一心不亂の心と慳吝の心なく物を施す心……………二九

秩序を持ち禮儀を重んずる心……………三三

明らかな智慧……………四七

總べてを忍びて受け入れる心と難き事をも厭はぬ勇猛心……………五〇

光り眩ゆき黄金の道……………五四

雲か山か吳か越か……………六七

不思議なる名目眞理の正中心……………七四

驚く勿れ光明の本體……………八二

闇と光……………九四

一葉落ちて知る天下の秋、一花を見て春を推せよ……………一〇五

小兒乳の味を知らざれども自然に身を益す……………一二三

黄昏時の花吹雪……………一二七

▼教會へのみち

教とは聖賢が凡夫を啓發し給はんがために不思議不可解の妙理を居ながらにして悟らしめんとて説かれた華麗な御語であります。

令とはこの華麗な御語を諦らかに承はりて自からも守り人をしても行はしめんとする莊嚴なる行であります。

故によく聽いてよく行ふ人を誰でも教令會員と言ひます。

光明の臺

奇なる哉妙なる哉

宇宙の森羅万象

天地山川と云はず、生物の自然の現象と云はず、宇宙の森羅万象の經緯の姿は、全く不可思議、不可思議の極で、能く考へれば考へる程、何とも其妙、其奇、其不思議な有様や、其不思議な作用には駭ろかすには居られません。

天

天文学の書を閉りて、天を仰いで御覽なさいませ。あの限りもなく際涯もなく、廣く大きく、深く遠いあの大空には、毎夜數限りも無き星屑が、輝いて居るでは

ありませんか。それが一つとして動かないで居るものも無いのに、一時に秩序を亂して荒れまはつたのを見たこともなく、また厚雲の爲に見えなくなることはありまして、粉碎されてみんな一時に無くなつたと言ふ話も、聞いた事が御座いません。それから晝の太陽にしましても夜の月にしましても、一つづつ交代に輝いて居りますが、若し假りに、太陽と月と一所に出て一所に沈み、晝は二つ出て夜は輝くものがありませんでしたら如何でせう？また遠い近いは何れにしても、地上から見てもどちらも同じ様な大きさにさへ、輝いて居るので御座いますもの。また太陽や月ばかりでなく星にしましても、明星と月との間位な星が、出て居さうなものをそれも見えないではありませんか。地上から十里位の所に大きな、大きな星が居て、離れもせず着きもせずに居りましたらどんなでせう。それ

でも自然なら如何とも致方もありますまいのに、そんな事もあります。そして太陽は我等に、熱と光りとを與へて働きの希望を起させ、月は露と輝を恵んで慰安と歡喜とを起させて下さいます。復其上に、あの數知れぬ星の一つ一つに就いても詳しい研究を積まれた方なら、益々其の何とも言ひ得ない姿に、一入驚ろかされる事でございませうと存じます。

あの大空を飛び行く雲にしても、其の形や、色合など、また山の雲や海の雲、高き雲低き雲、或は遠き近きなど、時節によりても色々に變はる雲や霞の、それがよく、遂には雨ともなり、霧ともなり、雪ともなりして恵みの露を垂れ、萬物を濡ほすのですもの、夏の夕立、冬の雪、春雨時雨、霞、霧、淡霧、霜、露、霞と言ふ様に數へませば、何と華やかな美しい變化ではありませんか。

昔から宗教の標的として、この天體を度々信仰せられ、所々に禮拜せられたのも、あながち無理とは言ひないではありませんか。この種の信仰を無智呼ばはりする人もあり、迷信と言ひ棄てる人もありますが、既に成立し已つた今の躰の、運行状態や、構成物質の何たるかを、或は單に其關係などばかりを研究して、唯あながちに此類の信仰を、迷信よ無智よと、笑ふ人々は、寧ろ百尺竿頭今一步を進めて、構成物質の何物たるにせよ、成立變化の如何にせよ、其妙なる姿や、微妙な運行を熟く思はざる事の、美的情操の上からしてもあまりに幼稚にして、なほ五十歩にして百歩を笑ふ類を、出でないのではあるまいかと、返つて其荒さみ果てた心も哀れにも果敢なく、哀しみ且つ慙れむのでございます。

またかゝる觀察は一方しか見ない言ひ草で、美的に觀察する癖の夢想者流の十
八番と仰せられる方もありません。蒙古アラビヤの砂漠、南北二極の寒冷、印度
アフリカの極熱、別しては傘持たぬ出先の夕立や、衣薄き旅の大雪山、時外れなる
霜や霰の害と言ふ様に思ひ來れば、決して寢床の中の夢や、火鉢を懷いて寫眞を
見る様な理法には往かぬと、いづれも適切な反對論がある事と存じますが、萬づ
心を沈めて、靜かに常時の天の動作を思ひ、我が身の果敢なさと霄天の悠久とを
深く考へられましたら、あながち此論が夢幻觀ばかりでないかと、感じられるであ
りませう、また悟られるふしもあらうかと存じます。

勿論、かゝる不思議の一切に體達して、唯一切を慈しむ爲め敢いて眞諦を教へ
られる人ならんには、此限りでありません。

地

また眼を俯せて大地を御覽なさいませ、地上幾億の山川、草木、家屋、人畜、岩石、土砂、など一切の色々の重きものを載せて、能く堪え日夜も休むと云ふ事がありませぬ。火炮の響き天に冲すれども地揺るがす、霹靂雷音一天に震ふとも露も騒がず、沛雨軸を衝き暴風坤を倒さんとするにも、ひるむ色も見えませぬ。萬色々の性命を擔なひ負ひて、能く之を生長せしむるなど、地の大徳かとも見られるではありませんか。若し此の我等が住所にして動き揺めき、壊滅没落無常でございましてたら、吾等は一日として安心して居られませうか。若し不安でしたら總べての希望も計畫も、怖畏と絶望とに消え失せて了ふ筈でございます、今思ふ者も思はぬ者も皆安心して、勝手に論じ心の儘に振舞ふて怖れないで居りますのも、此また大地の確立の徳とも見られます。而かも地中には深く、金銀、寶玉の

諸の寶をひそめ、諸種藥泉藥湯の藥をも出して居るのであります。堀りても盡きぬ厚さあり。芒々果てなき廣さあり。それに山川草木の配列、起伏重量して、何と華々しき美しくしき狀致ではありませんか。古も此の地にて斯かる物語りをとひむとか、將來は此の地に斯かる經劃ありとか、殊に人生の歴史と云ふ歴史、地理と言ふ地理、理學、醫學、文藝、美術は皆地上を棲家として、限られた器に、夫々の影を宿して居る人間世界の、各自個々の安心の姿ではありますまいか。

古代文明以來民族興亡の跡を尋ぬる一切の、分極的歴史を捨て、心靜かに憶想せば、獨りソロモンの榮華を野百合の一輪に哀れみ、道長の繁榮を流水の泡沫に悲しむしばかりでなく、今迄のあらゆる歴史的生滅の跡は、實に花一春の榮に例

命でも見られたものばかりではありませうけれど、皆悉くこの大地を舞台として、表現された、永い幾幕かの人生劇とも見られるではありませんか。

されば永遠の安心決定を求むる人々には、今に時めく地理的興亡の姿も、床上の花と思はれて、昨日迄は圓閣高塔天そり立ちし繁華も、一夜の兵火に焼土となり、一陣の戦風に荒蕪せるをば、唯に支那、露西亞、獨逸の現状ばかりで、未來永劫我等が身には近づく来らずと、思ふて安心も出来ませうけれど、何れも同じ地上に活躍せる、大舞台の一變化と見られるではありませんか。

現實界のみを研究する理學醫學等の學書をば、先づ擱をきて、靜かに冥想をこらされよ、空を飛ぶにつけても眞理界の應用ですし、諸種の動力につけてもこの地上との關係を離れてまた、何の發明や、發達がありませうか。刀圭、其術を盡す

とするも、藥品の性質に病に對して愈すに堪ゆる力用がなければ、人の其の病は愈りませうか、必らず單に醫學者一人の力ばかりで事總べて満足するとは、確言出来なくなりませう。文藝としても大地の背景を難れ、秩序と安立とを捨てなば何物が存在しませうか。美術としましても大地を離れては何の動らきをなし得ませう。實に一切の人生の活動は大地に攝せられる事となるのであります。

而かも同じ地上に生えながら、赤い花の咲く樹もあり、黄なる花の咲く草もあり、白き花 紫の花、青や絞りと色々の種類もあり、葉の種類や幹や莖の構造等まで詳しく類別して研究しましたら、到底一朝一夕の談では濟みませうまい、辛實の草もあり、甘い果や酸い果の樹もあり、澁い苦いなど同じ樹梢でさへ色々でございませうけれど、一つ地性の等しき肥料にて、この變化があるではありませう

か。それに菌類苞子など、數へ擧げて、其の種類や特質効用などを、列べましたらどんなに夥しい數になりませうか。これも同じ地性の表現であります。今博物の書を抛つて、深くこれ等の事物を熟く思はれましたら、其變化の妙に不思議がらずに居られませうか。

斯く言ひばとて、人文を輕ろしめるのでもありません。また淺薄、陳腐な説ど一笑に附す方もございませうけれど、此の事實は事實で、何うする事も出来ずまい。昔から藥泉や、藥湯を神の泉、神の湯として禮拜し、或は佛の御惠、尊さ御方便と崇敬したのを、直らに迷信と笑ふ方もございますが、能く考へられたら必らずあまりに情なき、批評ではありますまいかと、私は返つて其人の腐敗しかけた、鈍つた根性を哀れまずには居られませぬ。

勿論、かゝる不思議の一切に體達して唯、一切を慈しむ爲め敢いて第一義を、教へられる方ならんには、此の限りではありません。

山川草木

斯く思を凝らす眼を上げて、山川草木をも觀じ來る時は、またこれにも不思議な言ひ表はし様のない姿が見られるではありませんか。

山の高低も種々に異なり形も様々にかはり、岩山土山砂山と其趣も各々美を添へて居りますのに、川の景色の色々なる、樹木草莽の數々まで皆悉くそれぞれの趣を添へて居ります姿、特に川流れて水清く岩にせかれて散る早瀬、山に抱かれて淀む深淵、草木殊に種々の態をなして風緻を添ふあたり、春には水紅にして花笑ひ、夏は水青へして樹梢茂り、秋は水白くして草木紅葉し、冬は水黒く

して調落衰廢の態を現はすなど、あはれに四期の時節を能く知りて教へねどもよく時に適へるは、よも唯事にはあらず、誰の所造か何人の所作かと思はないで居られませうか。一世の大權を握ると雖も春を夏とし冬を秋とは致し得ますまい。いかなる大富の長者と雖も天下の春は動かす事は出来ませんまい。

これも獨りバリサイの人のいかに驕れるも、天帝の御胸を動かし得ざりしはさて置き、鎌倉山の岩躑躅春の朝に微笑むもこれ執權の威に非ず。由井ヶ濱邊の月影の秋の夕に輝くも、また邪僧輩の力にあらず、果して何物の力用で御座いませうか。果して何物の作用で御座いませうか。

○照らすとも月も思はずうつるとも水も思はぬ廣澤の池。
誠に照る月も照らすと思つて照らす心がありませうか。水の清きも月を寫さう

とて、澄める姿に待つので御座いますまい。山は高くして草木繁り川は低く水清うして魚貝を住ましむ。木繁れば鳥集まり草茂りて虫を鳴かしむ。

而かも川低きを以て山の高きを怨まず、小草惠露の小きを以て大木を嫉まず。

○あれを見よ深山の奥に花ぞ咲く、真心つくせ人知らずとも。

人も通はぬ深山に櫻花美しくしく開けるも、訪ふ客を待つ心でもありませんまい。ア、山川草木情なきか、耐忍強きか、此れは讀む人の心のまゝに委せませう。

山の石などにしましても、水成岩とか火成岩とか言ひますが、御影石の様なものもありますれば、大理石の様なものもあります。同じ山の石でも金剛石と瓦との差別さへあるではありませんか。川にしましても水は低きに向ふを性とするとは言ひながら、小鹿の足跡に湧き出で、少時木の葉の下くゞりし山水の、流れ流れて

河となり、漸く大となりて海となるまでその屈曲緩急の様子は、心を停めて究ぬれば、宛かも人文の歴史を物語るかの様、治亂盛衰の跡も川の流れに見る心地すとはかり、變化に富んで居るではありませんか。曲折多き徑路は大偉聖人の一生を示される様な心地さへ致します。

斯くの如き推理を進めて一草一木の各部を見ますれば、花となりて開く部分もあり。枝葉となりて繁きを見せる部分もあり。根となりて地下に埋もれて全躰の力となる部分もあり。其種別特質功用などについて言ひましたら、また一種の部門ともなり學問ともなりまして、一朝一夕の談ではなくなりまして。唯此一例によりまして萬事は御心にて御察し下さいませ。さて何故こんなに複雑ですのに秩序が調つて少しも亂れないので御座いませう。今の人口位でマルサス論を擔ぎ出して

頭を悩ます人々は、唯半面のみ観察で推論したのではないでせうか。今少しく自然を應用し天然を利用しましたら、随分間に合ふ方法もあるではないでせうか。定めし此論も滑稽な推理と笑はれる方も御座いませうけれど、あまりに科學的に進み過ぎて居る人々には、滑稽にも亦非文明にも聞こゆる丈け、それ丈けにても理解を得度くと思ふばかりに、或は少々は激越した論ともなりませうけれど、毒藥變じて甘露となる衆味に勝れたりで、次々まで今少しお讀下さいませ。勿論一切に體達して唯一切を愛ほしむ爲め、言はれます人々の御言葉は此限でありません。

大海

海はまた如何にして成り立ちましたにせよ、何處に往きましても同一鹹味で、

程度こそ異なれ甘い水や辛い水やはありません。また百千の江河一時に入れども増さず減らず、水常に清浄にして穢芥を停めず。

海中にはまた真珠珊瑚等の寶をひそめ、いと小さき動物より實に大いなる有情迄をも遊ばして、しかも少しも嫌怠の色さへ見せないではありませんか。

而已かは月滿つれば潮來り、月去れば歸る。朝に金波を浮べ夕に銀波漾へ、其妙趣、其清艶美しくしき眺めは、ともすれば沮々眠れる如き静けさが、時には怒濤

巖を噛み白浪天に沖する姿となる妙力を具へてとは考へられない位であります。其中に棲息して居る幾千萬と云ふ數をも知れぬ魚類貝類は、皆各自特質を持ち

赤き色や青き色や、黒き白き紫など、泳ぐものはふ者土着の者と、形に於いても色に於いても作用に於いても、皆一々に異つて居て悉く其特質があるのであります。

す。それに混布、わかめ、海苔、てんぐさと海藻類、藻類などまで擧げて見ましたら、到底少しばかりの紙上には、盡し得ない事でございませう。

それが同一鹹味の水中に棲んで居るのですから、たゞに泰西の哲學者や思想家を借りて参りませんでも一日位の興味は起る筈ではありませんか。

暫時出來已つた現象界の研究書を伏せて、何の力かとよく老へたら、驚ろかすに居られませうか。不可知の神の創造として信仰を求められたのも、唯あながちに無理とばかりは言はれませぬ。

唯、此等一切の不思議によく體達して、而かも一切を慈しみ導びく爲めに如法に教へられる方がありましたら、此限りではありませぬ。

醒めよと鳴りわたる自然の鐘

人もよくこの天の如く廣くして涯てしも知れぬ平等の心を持ち、地の様に厚くして底さへ知れぬ同情をはこび。山川の如く定まりて變りなき自然の秩序を保ち草木の如く美しくしき自然の時と處を知る智慧を得て、常に心を大海の深きにおき、海の潮の干満の様に、善を増し惡を去らしめ、千種萬様の諸種の生物の游泳にまかせて、障礙なき如き大度量を具備し、しかも勤む可きの道を忘れず、進むべきの時に適宜に、能く理に通じて過たずば、世間の人と其形も姿も變らなくとも、心の光りはいかばかり強く、復いかばかり嵩高きものとなるで、御座いませうか。そしていかに楽しい淨らかな生活が、送れるで御座いませうか。

天の如き廣き心と、地の如き厚き同情とは、遂に此の人から、心の曠りと、心の恨みと、心の嫉と、心の妬と、物を嫌やがる心と、人を惡くむ心とを、取り去

つてしまします。また若し取り去り得なければ、曠りの心は反つて憐れみの涙となり。恨む心は反つて他人の幸福を祈り願ふ心となり、妬む心は返つて自からは習ひ、人には教ふる心となり、妬む心は反つて世の中の爲めに、他人の幸福を悦ぶ心となり、物を嫌やがる心は反つてそれに親しみ學ぶ心となり、人を惡くむ心は反つて物を愛する心となり、大切に取扱ふ心となります。

山川の如き自然の秩序と、草木の如き自然の智慧とは遂に此人から、愚かな心と、迷ひの情と、我儘と、放逸と、惡癖と、癡かな想ひと、曲れる心と、ひがめる心と、忘れやすき心とを、取り去つてしまします。また取り去り得なければ、愚かな心は反つて勝れた心となり、迷ひの情は反つて殊勝な作用となり、我儘は勤勉となり、放逸は自由となり、惡癖は善き力となり、癖かな想ひは明らかかな智

識となり、曲れる心は反つて悪人を見ない心となり、ひがめる心は悪口を聞かぬ心となり、忘れ易き心は、邪念なき心となります。

大海の如き寛容の大度量、忍辱の心は今迄示しました四つの觀念、この起し難い精神を奮い起すと云ふ、斯かる難きに進む心と相待ち相結んで、一切の貧りの心と、邪欲の心と、悪欲の心と、非道の儲けと、慘忍な心とが、なくなりません。若し無くなり得なければ、貧りの心は反つて一切を施して惜しまぬ心となり、邪欲の心は反つて正しき道を求むる心となり、悪欲の心は反つて身命をも惜しまぬ心となり、非道の儲けは反つて道を護り人を救ふの心となり、慘忍な心は反つて懺悔知恥の心となるのであります。

斯くの如く申しましたら、中には定めし、理想ばかり高く、實際には疎く、

人生の、力もなき、魂抜きの、間ぬけばかりの世としてしまひ、發展にも、向上にも、役に立たぬ觀念と申される方、或は思はれる方も、少なからず御座いませうと存じますけれど、これについては今一通り、聞いて頂かねばなりません。即ち向上發展と申しますと、其の基く所は、必らず心の力の強弱によるのであります。輒ち心の力に就いて、善と悪と何れが強いかを、今假りに比較して見ませう。勿論今迄は、大抵善の力は永く、悪の力は短いか、或は、最後の審判とか云ふ事で、心の力の強弱を、論定いたしました。これが、根底から悪心の弱さを挫き終つて、居りませんから、今迄の論以外に、論を立て、見ませうならば。

いつの世でも、善人は少なく、悪人は多く、故に、善人は大體は一時敗けて、

悪人は先づ勝つ様に見られますが、またそれで、人の傾き易い性質の悪を以て、強いとさへ言ふ者、或は思ふ者、或は私かに考へて悪に趣く者、全く善を笑ふ者、善を滅ぼさんと企つる者まで、出来ました事で、クリストも、ソクラテースも、孔子も、顔回も、乃至は佛教の先覺者達も、多く皆、この悪の力のために撓められて、希望を満足せしめ得なかつた事實を見ても、日蓮上人が、立正安國の大本願さい、御存命中には、到達し得なかつたと云ふ様な、點から見ても、確かに悪の強さを言ふ者の、利益な論據と考へますが、然しこれ等悪人の勝には權威がありませうか。即ち、多數の悪の企圖が成就して居りませうか。善人も小さな心の善人でした爲め、敗けたのではありませまいひ。また時を見る力なく、人の機を知る力なく、法を悟るの力なく、眞を徹する力なく、こんな色々な故障の爲め

に敗けたのではありませまいか。或は其等は全く具備しても世が亂れ過ぎて、善の力の薄くなり果てた、時代であつた爲、満足し得なかつたと云ふ様な、爲めではなかつたでせうか。

若し爾らば、是等總べての高き、強き力を養ひ持ちて、時も、また能くこれに適したならば、必らず、世は凡て正善の力に、化せらるゝのではありませまいか。

譬へば釋迦如來は、如上すべての事に通達せられて居りましたので、一代を風靡し、一世を化したのではありませんか。時を得、處を得、人、その力に満ちた結果でございませうが、九十五種外道、各々、蘭菊の美を競つて居た時で、随分亂れた思想界の中でしたのに、一つは貴人の出なる所以も、ありましたでせうけれど、十二年にして攝化し、單阿陶汰三十年、遂には提婆墮ち、阿闍世歸し、六

種外道は、涅槃會に首を垂れて、依正に亘る本佛の化導は、成就せられたのでは
ありませんか。

末だ、如何なる聖人も、天を動かし、人を統べ、地を率えし、斯の如きを、見な
いのであります。眞に、道の王であり、法の王であります。茲で、理論で極はめ、
實際の人まで、示しましたのですから、これで、正しき善の心の力は、遂には、
大力を表はす事を得るものと、知られる理由と、なる事と存じます。そして惡の
心の力の弱い事は、永久的持續力がなく、その性命が、一時的なことで、充分に
知られる筈でありまして、こゝには善の心の力の強い事をのみ示して、暗に、讀
まれる方の御賢察にまかせます。

若しこれでも、なほ、疑を起して、信じない人は、其心の中に、法を輕んじ道
をならはず、常に善き事は之を厭ひ、惡しき事は之を好むと云ふ、惡魔邪靈に憑
かれた人と、斷定いたします。即ち邪人でありませす、惡人でありませす。
これから先は、少くも、善い事には例令小さい事でも、心を止めて之れをつと
め、または出來ぬまでも、勵まうと思ひめぐらし、惡しき事は、いと小さき事
もなほ、心を止めて、改め様と力め、またはこれを能く悔えると云ふ様な、人々
でなければ、讀まないで下さい。

明哲なる哉、澄靜清明なる深淵の月

そこでこれから、明らかな智慧を欲し、何事でもわかる様になりたいたと、常に
念ひ、能く人にも聞き、能く覺え、能く解り、我れも人も、同じ心の光明に生
きたいと願ふ人に、また信心を起して、よく道を説く人の許には屢々參り、數々

説教も聞き、少しづつ、それを行はふと云ふ様な、心の底の奥床しき人に、また常に、心を慈しみの情深く、一命にかゝはる様な大事にさへも、奇険を忘れて、能くこの爲し難きを守る人に、また能く一心の信心を起して、深山の中にも入り、或は深山にまでは入らずとも、多く衆の凡俗の世の塵を厭ひて、真正の心にて道を樂しむ人に、また悪しき友には親しみ易く、善き友には近づき難きが、人情の常でありますけれど、この親しみ易き悪友をも、正しき道を思ふが故には、勇ましき心にて離れ遠ざかり、人に嘲けり笑はれるのも厭はずに、近づきにくき善き友に交りて、道に順ひ進む様な人々にと、筆を進めます。勿論、俗言耳に入り易く、誠の聲は聞きにくいのが、誰しも同じ人間凡夫の情であります。必らず、これからは、世にも珍らしい眞珠を捨つた心持で、清き心の無上寶珠を奪はれた

り、こはされたりしない様に、一心によく之を守り、引いては、この心を以て、一切衆生をも輝かさうと御覺悟なさいませ。

親として人に對した時、誰か子として可愛がらぬ者がありませうか、子として人々を愛し思ふ時、誰か親として従はぬ者がありませうか。

衆人を親と思ふ時は、世の中の人の言葉は親の言葉ですもの、無理や少々の間違は、自分で直し順へば、よいではありませんか、衆生を子として見る時は、皆人の言ひ條は、悉く可愛い、我が子の願ですもの、無理も少々は、通してやらねばなりませんし、間違がありませしても、なるべくは、許して、静かに教へ、導かねばなりませぬ。勿論責めるも、誠むるも、また例令憤怒の姿を示しますのも、この心の上からなら、唯慈悲の両面ですもの、何の差支もないのでありませ

す。されば、いつも心を、柔軟に持つて瞋ることなく、一切を愍れみ、道を樂しまねばなりません。

大變六ヶ敷い事になりましたが、要するに悪い心を捨て善き心を増さしめる様に、心懸けらるればそれでよいのであります。そして善い悪いの差別は直接、深い教理をやさしくして、親切に、平易に、面白く説かれた、釋尊の御經に、よる外ありません。そして御經の六ヶ敷い所は、學者や名僧に、お尋ね下さいませ。

東に迷ふ者は對當の西に迷ふ

そこで、これからは、悪人、邪人、魔人の、ない筈ですから、徐ろに、晴けき光明の臺の上に昇り、共に俱に、清き淨き、深法の光に照らされて、樂しき集ひに加はりませう。それには、前に示しました道を歩み、階梯によらねばなりません。

せん。即はち、天、地、山川、草木、大海の五ツ、その順次に一心不亂の心、(禪定)、一切の望みにまかせ悠々として施し與ふる心、(布施)、秩序を持ち禮儀を重んずる心、(持戒)、何事についても、其理由を知りて、明らかな判断の出来る心、(智慧)、此等すべての難事を、よく忍びて受け入れる心、(忍辱)と云ふ配當になります。これに、全部に通じて、根となり、力となる、一心不亂に、より善く進む心(精進)、が加はりまして、都合六ツとなります。

一心不亂の心と慳吝の心なく物を施す心

一心不亂の心とはどんな心の事を申しませうか、即ち一心不亂とは母親が一子の病を慮ふ様な心も一心不亂です。兎が獅子を怖れる心も一心不亂です。餘念なく學問を研究するのも、一心に信心を出して、神佛を禮拜するのも、この不亂の

禪定の初一念と言ひ得ます。昔は三年も九年も、石の上や木の下に坐つて、考へた人も御座いまして、こればかりを禪定と申しましたが、今はそうした暇もありませんし、また例令ありましても、長年かゝつて、結局、禪定と言ふものに囚はれ、する事、爲す事、素頓狂な、不眞面目なものとなつて了へ、極めて、不眞面目な行状を、眞面目と悦ぶ様になり、世を害して居りながら、世を益して居ると思ふほど、間違つたものになつてしまひます。そこでこれは正しい不亂の、一心でなければならぬ事になります、それで何が、最も正しい、一心不亂であるかと申しますと、解り易く言ひば、凡そ人間は、死ぬ時ほど、一心になる事はありません。即ち、死ぬ事があります。

そう言ひばとて、切腹や、自殺を、すゝめるのではありません。そこで、この

死ぬと言ふ事も、正しい死でなければなりません。

孔子は、朝に道を聞いて、夕に死すとも可なりと言ひました。クリストは、その生命を、保全せんと欲する者は、之を喪ひ、我がために、生命を喪ふ者は、之を、保全すべしと、申れされました。其の意は、正義の爲めに生命を捨つる者は、生命を得ると言ふ事でありませぬ。それで生命さへも捨てると言ふ、覺悟つきましたら、外に惜しい物や、欲しい物が御座いませうか。名譽も、利害も、望む所もなくあります。そうなれば、貧しい人を見ては、與へる様にもなり、求むる者には、施す様にもなるのではありませんか。この働らきを、即ち布施と申しまして前の禪定と、この布施とは、二つでありまして、一つ心の両面であります。即ち自分の行として考へれば禪定で、他に向つて發動する時には、布施となるのであ

ります。そして、他人に施した時には、人の喜びを喜びとし、人の憂へを憂へと致しますから、自己と言ふ、利得の觀念がなくなります。是れを、正しい禪定と云ひます。それを何でも面壁九年と、猿の様な、せはしない心を、一つにし様とあせりますが、心は、書にかいた馬とは違ひまして、一つにし様とすれば、次から次と、妄想が起り、あせればあせる程、禪と遠くなるものであります。要するに禪定とは、内面的清淨の心を申しまして、布施とは、外面的清淨の働らきを申します。何れも清淨でなければなりません。そして、其の清淨になるのには、心の底に常に慈善と同情が必要となるのであります。即ち心廣き親が一子を思ふ心を以て一切を見る時、また悪を見る事、兎の獅子を怖るゝ如き時などに起る心が清淨の心でございませす。そして其心を忘れず此かる心から出て勉強もし信心

もする時、清淨の一心となるのであります。

秩序を持ち禮儀を重んずる心

秩序を持ち禮儀を重んずる心とは、親に孝君に忠兄弟に友に夫婦相和し朋友相信ずる、皆この心の様なのを申しまして最も知り易きかはり、また最も行ひ難く洵れ易い事で近頃殊に大切と存じます故、一々について示しませう。

親に孝行と申しまして色々ありまして、親の仰せを背かぬ事も、親の言葉を能く守る事も、親の力となりて慰める事も、親を助けて其仕事を手傳ふ事も、いたはるにも厭ふにも、苦を抜き樂を興ふる心が根本となりまして、其上に正しい智識によりて過去にも悔えなく、現在にも障りなく將來にも迷はぬ、人の子としての正しい道を守るのが眞の孝行と申しのであります。

昔光明莊嚴と云ふ國に王様がありまして、其名を妙莊嚴と言ひました。其王に淨眼、淨藏と言ふ二人の王子がりました。父大王の邪道を信じて居られたのを翻へさせ奉らんと思へて、人には木の端の様に嘲けられ、寒媛の様に疎められる僧侶となり、自らは欲を鎮め慮を凝らし、遂に悟りがたき法を悟り、入り難き佛道に猛進入躰して一心に修行をつとめ神通力をあらはし、終には父王の邪信を正信に入換へたと言ひますが、是等は正しき中の最も美しい孝行であります。即ち過去には身を以て法に隨へ、現在には邪を抜き正に入れ奉り、將來には悟りの業しみを得させまつりし事、實に大なる孝行と申さねばなりません。君主に忠義をつくさうにも唯々君主の仰せをよく守る事、仰せに違せじと勤め勵む事、君主の力となりて惟幕に參與し、君主の業を助けて其願を満さんと勤む

る事、仕へるにも勤むるにも惡を遮へ善を進めん念願の心が根本となりまして、其上に正しい知識に依り、過去を調へ現在を淨め將來を企らん事をよき忠義とは申すのであります。

鎌倉時代に江馬遠江守の臣、四條賴基は、譜代相傳の家柄なる上能く忠勤を出して謹直に勵み、仁を體し義を守りました武人でしたが、其比上下萬人虎を怖れ狼と惡くみ嫌へし日蓮上人の教へに隨順し奉り、その忠言を躰して後には寸言もよく守られ聖人龍の口の大難には命さへも出さんとされましたが、遂に此信ありて主君が邪信を正すの動機となり、初めには用えられず所領までも剃ぎ擧げられました。程なく恐りも解け所領も復し、俸縁も増して許されましたので、主君を正しき道にと導き奉り、鎌倉武士の花と稱はれましたのであります。是

れ等は正しとも美しくとも、華やかにして莊んなる忠義、萬代人の臣たる者の拜むべき鑑と稱ふべきであります。即ち過去には遭ひ難き正法を護り、信じ難き聖教を讃じて能く勤め難きを勤め奉り、現在には迷へるを轉じて冥闇を除き、將來は主従共に三世の鑑とならん事、大忠の中の大忠と申さねばなりません。

兄弟に友義を出さうにも兄は弟を愛し弟は兄を敬ふと言ふ事で、一口にはあまりに簡單であります。今二つに分けて示しますれば、先づ兄としての場合には弟を、財を殖ち食を割きて唯愛しかばふ事も、苦きは己が口に甘きは小ささが口にといとしみ育くむ事も、善きをば賞め悪しきをば誡しめて罪なかれかすと、勵まし勤むる事も、もし弟に罪あれば己が罪と感じて一人其責を負ふ事も、また若し悪しき志あらば諫めもし責めもして正しきに翻らせる様に勤むることなども、

數へ來れば仲々ありますけれども、すべてはより善き人に進めんと念ふ赤心の現はれにて、この引證などは順次に勝れたる友義の道程であります。これにも自ら迷なく、誤なく、正しき誠の道の人であると言ふ六ヶ敷い條件のついた、親切と同情が必要となるのであります。

弟が兄を敬ふにも年上の方なれば、一も二もなく悉皆仰せに従ふと言ふ致し方もあり、兄の心を知り己が本分を考へて、務めを守り本義に安んじ、扶助の功を出すと言ふ事も、復もし兄に罪あれば我れに其責ありと罪に服して、兄に代らんと念願すること、もし兄に禍あらば諫めても、兄の心を正しふせしむると云ふ義を忘れぬ事なども、數へ來れば種々あれど、仰いで高き兄の徳を重んじて事へ奉らんとする心に止まるのであります。要するに弟は兄の徳を讃へ兄は弟の正

しき志を愛で、和樂の光に集ふ時、敬愛相友の成就とも申べきであります。鎌倉時代の武士に池上宗仲、實仲と言ふ二人の兄弟がありました。世は末になつて邪信邪法は盛になり、人の智は之等枝葉の幼慧に覆はれて昏冥に趣きつゝ、ありました時、未だ戦鬪の兆し眼には見えねど、道は日に頽廢の状にゆるく、徳光夜に衰いて慢の幢高かりし時、日蓮聖人の教を享け彼等が正しき敬愛の徳は光明となりて、暗路に迷ふ父君を救はれたのであります。

此の持ち難くして捨て易く、受け難くして擱き易く、讀み難くして閉ぢ易く、讚り難くして抛ち易き如來第一の聖教を護持し奉載して、父太夫の迷を開きし兄宗仲は、初めは父の悲りに觸れ遂には勘當さへも受けましたが、弟は父に常侍して其心を慰め、且つ折を見ては兄の心も亦其教も正しき事を訴へ、遂々老の一轍

頑迷にして動きもつかぬ父をして、正法に信入せしめし大功德、過去に徳本を種えて現在に慶びを成就し將來に、輝やきを萬世に垂れられた事は、實に美しく兄弟に友なるの得難き範疇と言はねばなりません。

夫婦相和するの道は、これも二つにして夫と妻との兩方面より見なければなりません。夫としての道は妻を信じて疑はぬ事に始まり、愛心を持つて女の可弱き足らぬ力を補ひ、能く其質をして全ふせしむる様にして上げねばなりません。

即ち夫に六通りの人があります。一には親の如く二には兄の如く三には善き友の如く四には夫らしく、五には下男の如く六には敵人の如くと、この色々の人々があります。即ち親の如くと申しますのは、妻を見ること父親の娘を見るが如きを申しまして、能く其將來を憂ひて常に其名利を念ひ、家を離れては安寧を案じ

家に在りては髪かみの先まきより足あしの下したまで注意ちゅういをしようと云いふ様なやう全くまったく父ちちの女むすめを念おもふ様なやう夫をつとを言いひ、二にに兄あにの如ごときとは、妻つまを見る事こと妹いもの如ごとく、能よく其そのの欲ほつする所ところを感かん知ちして與あたへ、その喜よろこびの情こころより徐おもひろに導みちびき、二二つの心こころなく世せ話をわして常つねに同どう胞ほうの同どう氣きなるが如ごときを申まうします。三三に善よき友ともの如ごときと申まうしますのは、若もし妻つまに悪あしき所ところあるに心こころづかば、静しづかに諭さとして其その罪つみを責せめ其その心こころをたゞし、善よき所ところあるに心こころづかば共ともに喜よろこび勵はげまして人ひとの爲ために奉ほう仕しする事ことをはかり、親したしき間あひだにも禮れいを失うしなはぬ様やうな夫をつとを善ぜん友ゆうの様やうな夫をつとと申まうします。四四に夫をつとらしきとは、常つねに妻つまを信しんじ妻つまを愛あいして、言こと葉はを和やはらげ心こころを勇いさましめ、若もし善よからぬ事ことあるに心こころづかば、其そのの依よつて起おこる所ゆゑんを知しつてこれこれを戒いましめ、常つねに善よく外そとに出いで、其その家か計けいを豊ゆたかならしむと言いふ様やうな人ひとを申まうします。五五に下げ男なんの如ごとくと申まうしますのは、妻つまの爲ために反かへつて給きうじ仕じして下げ男なんの主人しゅじん

を敬うやまふが如ごとく、常つねに其そのの心こころを損そんせぬ様やうにとつとめ、妻つまを畏おそれること宛あだかも下げ男なんの主しゅ婦ふを見る様やうな夫をつとを申まうします。六六に敵てき人にんの如ごとき夫をつとと申まうしますのは、朝あさ夕ゆう毎つねに其その妻つまと同どう居きよすることことを好このまず、他たし出ゆつしては酒しゅ池ち肉にく林りんに飽あき、遇たま々く歸かへりては悪あつ口こう罵はり詈じ打だ亂らん暴ぼう、丁ちやう度ど讐しゆう敵てきの同どう居きよの如ごとくなるを申まうします。これ等らの中なかに何いづれが最もつも善よきかまた悪あしきかは、讀やく者しゃの撰せんに任にんじまして次つぎに。

妻つまとしての道みちを言いひますれば、これには七ごほ通りつまの妻つまがありませす。一一には母ははの如ごとく、二二には妹いもうとの如ごとく、三三には善よき友ともの如ごとく、四四には妻つまらしく、五五には下げ女ぢよの如ごとく六六には敵てきにん人の如ごとく、七七には鬼おにの如ごとくでありまして、大だい躰たい夫ふうの部ぶ別べつと大だい差さはありませんが、第だい一いちの母ははの如ごときとは其その夫をつとを見る事こと、母ははが一い子しを思おもふ如ごとく、外ぐわい出しゆつの時ときは常つねに人ひとより輕けい易えいせられる事こともなきかと恐おそれ、入いりては朝あさ夕ゆう其その側かたはらに侍じし、時ときを見

ては養々の心をつくしてあやまたず、丁度慈母の其一子を愛憐する様な妻の事を申します。第二に妹の如くと申しますのは、常に二つの心を持つ事なく兄妹のいづれも同氣なるが如く、夫婿を尊び敬ふこと妹の兄を敬ふが如くなるを申すのであります。第三に善き友の如きと申しますのは、相愛してよく心をつくし、互に常に秘する事なく心の中を能く語り合へて、過あらば其れを諫め善き事あれば相敬ひて益々其正しき知慧を進ませる様、清き友の集りの様なのを申します。第四に妻らしき妻とは、夫につくすに誠を以てし、常に敬ふ事を忘れず、謙遜にして其命令をよく守り、従順にして純正、朝は早く起き夜は遅く臥ね、意をおさめ身を正し口を守り、若し夫に過失あれば己が身に受け、善き事は己れに屬しても之を夫婿にゆづり、女の道を守りて進みても儀をはづれず退いても禮を失はず、常に

相和せん事を心に懸けると言ふ様な、これを妻らしき妻と申すのであります。第五に下女の如き妻と申しますのは、常に心に畏れを懐き慎しみ深くして決して慢ずる事なくいかなる、言ひつけにも必らず避け忌む事なく、言葉柔らかに性質穏やかに、口には淺ましき言葉なく身には我が儘の行なく、設へ夫の道を盡さずとも恨む事なく、いかなる虐待にも甘んじて耐え忍び、決して悔る心なく恨む心なく、夫の好む所を進め、妬む事なくたとへ曲れるにも訴ふる事なく、衣食を望まざる願はず唯及ばざらん事を恐れて夫に仕ふるを下女の如き妻と申します。第六に敵人の如くと申しますのは、夫を見て歡こばず、常に瞋りの心甚しふして日夜に離れん事を願ひ、夫婦と言ふ心は少しもなく、喧嘩を好み、忌み畏るゝ事なく髪は亂るゝにまかせ形は粗暴にして、子を教へ養ひ家をおさめとゝのへる事を思

はず、淫蕩亂行して恥とも思はず、實に淺ましきものを敵人の如き妻とは申しま
す。第七に鬼の如き妻と申しますのは、常に恚りの心強く、速やかに別れん事ば
かりを考へ、日夜床を同ふせず、遂には諸種の毒藥や利き刀鎗を畜へて、夫婦を
殺さんと云ふ様な恐ろしい妻を鬼の如き妻とは申すのであります。

善惡取捨は讀者皆様の撰擇に委せまして、さて夫婦としての別類は申しました
が、これ等も皆其時と人と所とをよく考へて見なければなりません。

人世幾波亂、起伏重疊限りもありません。けれども各々其心を正しくして眞
面目に、夫は夫としての身分を考へ、妻は妻としての位置を思はれたならば、必
らず其間に夫々相應はしい道が明らかにつきます事と存じます。

今より凡そ六百六十年ばかり以前に、工藤吉隆と申す人の妻は、初めには妻ら

しき妻として美はしき徳を積み、中頃伊豆の江川に居て日蓮上人の感化を受け、
本化の正しき信仰に入りては念々精進遂に、夫の邪信を翻へさんと種々の諫言を
もして善友としての妻となり、夫を正しき信仰に入れ奉りて共に護持正法の大檀
越となりました。聖人小松原にて東條景信の難に逢はせ給ふや、而かも吉隆は此
の萬古に秀でし妻に後事を托して、身は羸弱の病床より鎗をとりて起ち、聖人
の膝下に殉しては命を三世の佛陀の願海に捨て、譽れを十方の諸菩薩の慈天に施
したのであります。願れば工藤吉隆は前にも能く夫としての道を踏み、後には妻
のために親兄の親情を持てる師補の友となりて、名を大法界の古今に流し、妻白
妙は、婦節を盡して一生を白蓮華大菩提海の大燈明となしたのであります。最も
崇高き夫婦としての模範儀表と申す可きであります。

朋友相信ずるの道は互に誠をつくして疑はぬにあると思ひます。疑はない故に心惑ふことなく従つて萬事について正しい判別が出来ます。また疑はぬ故に其交りは永く、長き交りなる時は互に其長短を知り得、従つて自ら其徳器を成就するにも、また互に道に進むにも車の兩輪となり、鳥の兩翼となり柱と桁との様になる事と存じます。これも唯單に世上の利害得失を計つて信じ合ふのを申すのではありませぬ。返つて世上の淺薄無慚な利害の爲めに合する友は、利害によりて交るが故に利害によりて離る、而かも或時は敵ともなる。飲食の爲めに交りを結べは三時にして早くも互に、其の名利を食ひ合ふではありませぬか。唯獨り道によりて集るもの、み齡長く、益々交友その誼が遠くなるのでありませぬ。

以上にて大略五ツの道を示しましたがこれ等の道を持戒と申しまして、秩序を

持ち禮儀を重んずる心なのであります。これにつけても明らかかな智慧がなかつたならば、心ばかりはあせりまして、あまりに融通のきかぬ失敗が多く、返つて血を以て血を洗ふ悲惨を呈するのでありませぬ。

明らかかな智慧

こゝに明らかかな智慧がなければ、自分には正しいと思つてなした行爲が、非常な過失となる事が少なくありません。唯にクリストを殺せし羅馬人や、日連上人を流せし鎌倉幕府ばかりではありません。孝行をし様として大不孝をなし、忠臣とならうとして大不忠の人となり、婦徳を致さうとして大慢となる様な事は、百千を以て數へ切れる事ではありません。是れ皆徳の判別に暗く智慧の正しからぬ所から起るのであります。例令ば賢き夫に侍し乍ら親の如くなる妻とならんと

する様な事や、神の國に生れ正しき人々に毎日接し乍ら、己ればかりは神の僕ぞと思ふ様な大失敗は、返つて大慢となるばかり油を負ひて火に入るよりも危ふく最も怖るべきであります。徳に戻るを自然と思ひ、放逸を自由と考へ、煩惱を精靈と思ひ、惑を悟と執し、妄想を默示と覺え、虚飾を禮儀と見、魔を神と慮へ私憤をさい輿論と言ふなどは、哀れなる衆生の迷へる眼の果敢なさは申し乍ら、誰かは涙に咽び慷慨の情に切齒して居るものもありませう。

敢て再び叫ばん、見よ天の高さを地の厚さを、山は高く川は低く火は上り水は流る、梅は春に蓮華は夏に菊は秋に、水仙は冬に開いて其美を示します。風は動き石は沈む。そも我れは何の身ぞやと觀じられよ、汝自身を知れとは誰が耳にか入れる、聞けよ天寶の響きを？松籟誰が胸にか應へん矣。

されば此智と徳とは相互に相助け相助けて、智は戒徳の正しきに資し、戒徳は智を益々明らかにして、父と母との如く天と地との如く、常に道を守り法を照らすのであります。即ち智とは内面的清淨の意を申しまして、戒とは外面的清淨の力を申します。ですから御都合次第で色々に變り、終りには悲哀悔恨、怨嫉瞋恚と、不安と恐怖に果てる様な道ではなくて、眞理を離れたり正心を忘れた凡夫や人間には始めはいかに苦しくも辛くも感ぜませうけれど、進めば終に悠々として自ら樂しむ事を得る底の、眞實の宇宙の眞理であります。人間同志の法律經濟でさへも、多少は意に添はぬ事も忍ばねばなりませんのに、ましてこれは高く遠く深く厚き道でありますもの、幼きより我慾煩惱の走せるにまかせて來た凡夫に、己心の我儘に任せて正しきを曲れるものにされては大變ではありませんか。

已に光明の臺にも遊ばん人々なれば、暗の心は露もあらじとは思ひませど、なやめる者に對して同情のあまり、慈悲の安賣をして向上の一步を進むる歩足を、中送に停めしむる勿れと警戒するのであります。

總べてを忍びて受け入れる心と、難き事をも厭はぬ勇猛心。

そこでこれからは忍辱と申しまして總てを忍びて受け入れる心即ち、耐え忍ぶ心と申しますのは、正しき道を行はふとする人には必らず付いてまはる一種の苦勞、布施を行ふと聞けば、門前市を爲すと言ふ今の世の、乞食根性の衆生に對抗して、而かも、惱やめる者を救へ集まれる者を導く爲めには、心勞も身の難儀も、艱難勞苦實に書き盡し得べきでありますまい。

昔舍利弗尊者、道を求め給ひし時、布施を行せしに一人の婆羅門來りて、其一

眼を乞ひました。尊者も妙なものを乞ふとは思ひましたが、修行なればと、言ふまゝに一眼を抉りて、與へられました。而るに其婆羅門は、また他の一眼をも望みました故、尊者はその一眼をも抉りて與へられました。ところが其婆羅門は、掌の上の兩方の眼球を熟々とながめて、人の眼は外より見れば綺麗な珠の様に見えて美しいけれども手にとつて見れば穢ないものであると言ひながら、大地に投げつけて、踏みにじり唾さへ吐きかけました。此の時尊者は悔恨の心萌して六十劫の長き菩薩の行を退き、二乘に墮し、博施濟衆の念願を捨て、永く成佛の出來ぬ道へと、歩みを向けたと聞きました。これは古き昔の物語りではございませけれど、今はなほこれにも過ぎた、貧りの人の心の熾盛な時ですもの、布施だけにても行せんとすれば、其忍苦は一方でありますまい。

青史に残る、多くの聖人賢客の苦を受けられた事は、已に世に凡ねく知れ渡つてゐる事ながら、其教を守り道を行つた人々にも、色々の苦難は少なからず、常に従つたのであります。基督の弟子としてはペテロ、ヨハネ、など、孔子の門人としても顔回などは、いかに其教に忠なる爲めに、人の苦難とすべき事を受けましたでせうか。その痛憂は一方では、なかつた事と存じます。

況んや、釋尊や日蓮上人の御事蹟に於いては、人毎に涙の種となり、血も冷え肉も凍る思ひがするのであります。よく此の爲し難きを爲し給へる事と、唯々驚ろくの外ありません。

今は昔とはまた更に異なり、人の心は淺まらうして、教へは守らず道は求めず、稍もすれば生活を主にして道は従にし、パンは主にして教を次にする時でありま

す。光明を言ふも道を陳ぶるも、皆この爲めにする様な時なのでありますもの、かゝる世ですから必らず、初めより忍苦の觀念を覺悟して居らねばなりません。悪口せられ罵詈せられても心に瞋らず、毀訾せられても心に恨まず、刀杖もて搥打されても遂に心に怒らず、常に六根清淨にして、一切障礙なき様、覺悟を致さねばなりません。

例令正義でありましても、この忍耐が續きません時は、必らず失敗致しませう。少々は悪なりとも能く忍ぶ者は、遂に勝つものであります。されば、善に順へ正に與みする者は、其心に能く忍ぶ徳を積まねばなりません。此の忍辱の心をも持つ事の、出来ぬ程のものならば、已に道を言ひ教を談ずる價値は、ないものであります。一子のみを持つ親も善く教養するには、一方ならぬ苦惱を受く、いかに

況んや一切衆生を子とする、教法の上に於てをやであります。

偕て以上演べ來れる道。布施にも禪定にも、また持戒にも智慧にも忍辱にも通じて、大切なる事は、いかにしても止むに止まれぬ、進み行く心が必要な事でありませう。これを精進と申しまして、一以て萬を貫く力となるものであります。凡そ人の心は、常に變り易くして動くものですから、進まねば退くを常と致します。人は進む時は力を得、此力によりてまた進み、能く究極まで行くものであります。而かも忍辱と精進とは心の力の両面でありまして、忍辱は内面的勇猛の精神の怒力にして、精進は外面的勇猛の精神の發動であります。

光り眩ゆき黄金の道

この六ツの道は、初めの二ツ即ち布施と禪定とによりまして、貪りの心を除き、

欲を斷つ事が出來ます。次の持戒と智慧とは、癡迷を除き、闇愚を離れる事が出來ます、最後の忍辱と精進とは必ず、瞋恚を除き心の平安を得るのであります。この六ツ一時に具足して自由に活動する時、此に初めて美はしき光明臺上の人となる事が出來るのであります。

此所に於いて顧みれば、萬徳を積みて初めて其六ツの中の一に到達し得るのであります。ありまして、其六ツの路を歩みつくして漸く光明の臺に、入り得るのでした。此に近い道の容易にして誰にも歩める平坦な廣い道があります。それは今迄示しました大徳、無数の法は不思議にも、宇宙法界の眞理と、一致して居るのであります。此故に其眞理を證り得さへすれば、何事についてもあやまらざる様になり、何人も難しとする、徳教道宗は、何の苦もなく遂行出來ることになるのであります。

す。今迄演述致しましたのは、眞理と教法の單なる關係に過ぎませんが、其境涯に達するの道、即ち眞理を證る道は、大別して八ツあるのでございます。

八ツの道とは、一、何事でも眞面目に正しく見る事、二、何事でも正しく眞面目に考へる事、三、何事でも眞面目に正しき語を以て話すこと、四、何事をするにも熱心と眞面目を忘れぬ事、五、これによりて正しき生活を營む事、六、智に於いても行に於いても學に於いても、正しき道を離れぬ様に進む事、七、正しく動かない眞の正念を持ち、八、心を正義の安定な地域に決せしめる事、等を申します。其中の一つでも正しくないのがありましたら、全部に影響しまして、眞の正しい境涯には、は入れません。

唯社會の事柄にしましても、労働者側の事ばかり見て資本家側の研究をせず、

一般民衆の裏面らしき表面の心ばかり見て、政府や社會の成行をよく見ない様では、正しき見方とは言えません。また百般の事皆然りて宗教にしましても全く同様でありまして、宗教家ともあらうものが、教主の説かれた事を捨て、自分勝手な議論を立て、或は爲になつてやる心算で、言はれぬ事までも心配して、色々工夫添削した説を立て、それを誠しやかに、一切の人々に告げるなどは、全く最負の引き倒しで、大變な迷惑な事となりますでせう。如何なる教祖にしても、それほどまで淺ましい根性を以て、我見を徹された様なつまらない人間ばかりだつたのでせうか。其一寸した忠實らしい心が、複雑淺薄な世間をこしらへ、争ひばかりして統一も基調もない、淺ましい社會を創り出す本となるのではありませんか。道を説き教を言ふ人なり、何故もつと淨い正しい心持になれないでせうか。

何故眞の正しい教に入れないでせうか。執着なく、傲慢なく、能く淨き耳を以て智者にたづね、賢者に問ふ心がなければ、決して正しい致方とは申されません。復考へ方としても、舊いからとか、新しいからとか、面倒だからとか、淺薄だからとか、色々に意見を立て、考へる事は、往々あやまり易い結果に墮ち入るのであります。政府問題や社會問題にしても、工商勞動等のみを中心として、政府や社會の全般を論じ、或は農業ばかりを中心にして、政府や社會を論じ、甚しいに到つては、机上の議論のみで政府や社會を攻撃し、論難することは、決して正しい考へ方から出た論とは申されません。殊に一世の師表となるべき、宗教家道徳家の多くが、憶測ばかりの悲觀や、樂觀のみを以て宗教の正邪決定の標準としたり、或は繁雜や單純を以て、適不適を判別したり、最も甚しきは信者の數によ

つて宗教の正邪を定め、或は自分勝手な妄想から、善惡正邪を立て、或は嫌好の玩弄心から眞偽を定め、而かもこれを人にすすめるなどに到つては、最早や話の外であります。決して決して正しき考へ方とは言はれません。言葉にしましても、正しき言葉を大切とするものでありまして、世の相にしましても法律の條文を態々、曲げて解釋をほどこし、智淺き者共を煽動する様な事は、決して美しくしき心の現はれとは言はれません。是等も心内に藏すれば、必ずず行外に現はるゝ理由に依るのでありますが、言葉は心とは異なり、引いて他人にも影響しますから、餘程注意せねばなりません。特に世の儀表となり、師補となるべき宗教家、道徳者の、やゝもすれば、何れの信仰にてもよろし皆同様の物なりなど、假初の言葉を以て、多くの人を惑はすの類、或は利害損益など物質

界ばかりの説を、誠らしく説き立て、凡夫世人の劣情に訴へるなどは、其位置として許す可からざる、大罪となるのであります。最も甚しきは已が信ずる教の中心なる經、或は書には、其教義もなく其主旨もなきものを、自由に他にある深き遠き尊き高き教條をとりて、淺く近く卑く低き言葉に渝みつけて、世人の愚かなるに薦むる様なのは、其人の智の足らざる故とは言ひながら、實に許すべからざる大罪にして、一切の世の亂離、不和、不善、惡縁は皆此の言葉より出づるものであります。惡しき心根も形に聲に表はれねば、一人或は數人にて濟みますものを、形に聲に出で、後は、害益汎ねく廣まるもの、最も慎しむ可く、最も謹しむべき事であります。

そこで言葉を慎まねばならぬとなりますと、宗教上の論定などは殊更、餘程思

慮深く沈着遜讓な注意から、言ひ出さなければならなくなりますから、況んや行状などは最も肝要で、何事をするにも眞面目を忘れない様にせねばなりません。故に、地藏様の頭に小便をかけて偉らがる様な事は、出来てもせられなくなりません。唯一つの偽言にしましても、これを眞實として通さうとしますと、將來に亘つて幾千幾百の偽言を連ねなければならぬかわかりません。それが言行にわたる事でしたら、猶更であります。そこで身と口と意との三つを、正しくせねばならぬと言ふ事になりました。一寸浪漫な自稱自由主義者等には、困ると云ふ事になりませんが、勿論困る人には、大いに困つて貰はねばなりません。全く虚偽な生活は送れない事となるのであります。尤も俗人には事情によつて幾分かは、許して上げねばならぬ事もありませうけれど、教育家や宗教家には堅く此段が、必

要となるのでありまして、賣卜業を何の依趣も理由もない、珍書などでやり出したり、自分勝手な信仰から、祈禱の真似をして、御金を貪りましたり、腐つた水を賣つたり、価値も無い御祭り騒ぎに、寄附をつのつたりする事は、全然宜しくないのをございます。と申しましても乞食がやりましたり、貧乏學生がやりましたりしますのは、止むを得ない場合には、分相應の所までは許してやらねばならない事と存じます。是事は近頃の學問を、おさめられた方々なら、迷信と云ふ明断な文字で、一蹴される事と思ひますから、詳しく其非を上げる要もありませんが、一寸、一言せねばならぬのは、祈禱がなかなかきくとか、不思議があつたとかで、直ちに絶對の權威と見る人々が少々見える様になりましたからですが、正宗教信仰の上から言ひますと、不思議や豫言や祈禱などは誰にも出来ることで別

に、有り難いのも何でもないものでありまして、鰯の頭でさへも拜み様では、光りが出る。それは拜がむ者の精神如何によるので、對者は眞理の一分子でありますから、天然の神秘性が伏在して居まして、それが光りとなつて現はれるので、木でも石でも、雲でも水でも乃至は吾人でも、なれるのであります。それを自冥と云ふ汚れ物に、慾を貪ると云ふ上塗りをして、神人とか靈格とか言ひますので、此れ等は、拜む者の精神誘導と云ふ本業を忘れて、天地間の何物にも存在する、潜在靈氣を、無上の絶對者と見做させる様な、主從顛倒を起すことになるのであります。知ららい爲めにするのだから、是非もない無邪氣な失敗ではあります。すが、光明臺上の人々のみは、こんな事は明らかに、存念せられて、狐の手躍りや、狸の腹鼓の様な滑稽はしないで頂き度いのであります。

また次に、例令難くとも苦しくとも、この正しい生活を続けながら、どうしても一歩一歩と、進まねばなりません。學に於いても勿論、行に於いてもまた色々観察しての智に於いても、邪から正に進まねばなりません。よく世の中には、大抵これ位でと、腰を落ちつける人があります。別荘に隠居をしてと云ふ様な人をも見受けます。これは形の上で見るとはなく、心の上で申しますのでございますが、必らずそんな弱い事ではなく、毎日徐々と根強く進む様に心掛けて頂かねばなりません。

別きて、宗教家などに、感謝の生活にさへ入り得れば、それで充分である、感謝の生活が出来ればそれで結構であると、一も二もなく何事にも皆感謝して泣いて居られます中に、最後の審判の日が來まして、願れば割合に功果のなかつた事

を悔いる様な、氣の毒な皮肉を見せられる事がありますが、聞けば聞き得る耳を持ち、悟れば悟れる心がありながら、何と云ふ事だらうと、人の事でも我が身に引きかへて、寒い様な感じがする事がございます。これは正しく淨き心もて、何所までも進むと云ふ事がなかつた爲めなのであります。

經濟や文藝とは異つて、宗教は永劫に渡る、大切な事ですから一層深い厚い御注意がして頂き度いのであります。そこで存生中に但單へに、簡單な心持で、自分がいと思つた信仰だものをと、頑固一點ばりに、それに執着して假りにも、名譽や利益を思ふ上から、こんな淺ましい宣傳を致す宗教や、宗教家がありますなら、外見はどの様に愛にあふれて、道々愛がこぼれて、歩いて居る様な方でも、それは皆、獨逸の毒瓦斯よりも悪い、害毒を世に流して居る事になるのであります。

す。而かも表が好さ相であるから、其害毒も猶更大きいので、眞に世を思へ人を愛する人々なら、能く考いて頂き度い事でございます。此所で今迄の一切の繫縷を断ちまして、自分は實際に前の六つの道に對して、即ち正しく見、正しく考へ、正しく語り、正しく行へ、正しく生活し、正しく進むことに合つて居るか如何かを、よく考いて見なければならなくなります。

これで確かに、明らかに正しいと、断定がつかまりましたら、正しい念慮を保ちて色々の誘惑に、勝たねばなりません。斯くて初めて正義の安定な地域が、決定するのであります。初めの正しく見て、正しく考へ、正しく語ると云ふ事によりまして、愚ろかな心や癡かな考へが、消えて行きます。次の正しい行學と、正しい生活と、正しい進取の氣象とで、貪りの心、惡邪の剛愎の心を去らしめる事が

出來ます。そして最後に正しい念慮と、正しい決定した精神とで、心の瞶りと短氣な疍癩が、跡を留めなくなるのであります。

要するに光明臺上の人々は、いづこともなきこの美しくしき光りに照らされて、自からの心を、支配し導く可きであります。

心を法の本と爲す、心は尊くして心に使はる、中心に惡を念じて、即ち言ひ、即ち行は、罪を苦しみの自づから追ふこと、車の轍をふむに其端がないと同様でございます。心を法の本と爲す、心は尊くして心に使はる、中心に善を念じて、即ち言ひ、即ち行は、福と樂しみの自然に、隨ふこと影が形につきまよとふ様なものであります。

雲か山か吳か越か

今迄は人間の情念を以て見て居た世界をも、今少し廣い、そして光り映えある眼を以て、見様ではありませんか。楽しい事に心奪はれた者は、苦しい悲しい者の心は知れますまい。苦しい人の眼には楽しい人の心はわかりますまい。心の鍵は皆々様御自心に、御持合せの筈ですから、御自由に隨時に、開かなかつた心の底を、靜かに御開きなさいませ。それで其用意が出来ましたら、徐ろに起つて、大空のあなたより聞こえ来る、砂の御聲に耳を貸さうではありませんか。正しいものは、常に一つであります。物の中心も唯一つであります。文字の國では此爲めに、一に止まると書いて、正しいと表はしました。然し皆々様の中には、此言葉は妄斷だと思はれる方もありませう。何故ならば正と言ふ事は、標準によつて如何様にも取れるからであります。例令て言へば、

彼の女は女として女の道を守るのが正しい。私は男として、男の道を守るのが正しい。父は父として、母は母として、子は子として、老人は老人として、若人は若人として、宗教家は宗教家として、農夫は農夫として、教育家は教育家として、政治家は政治家として、藝術家は藝術家として、職工夫は職工夫として、商人は商人として、皆各自その人その處にてその趣を顯はすこと、皆正しい即ち絶對であるから、已に幾千萬の正しい事があるではないか、石は石で、木は木で、草は草で、水は水で、火は火で、空氣は空氣で、力は力であるから、と申されませう。それはいかにも一應の見方と、申さねばなりません、然しそう言ひますれば、宇宙法界の十方の森羅は、陽炎の微塵より五大洲、六大洋の大まで、否とよ空も大地も皆分々の正と言はねばならなくなります。

盗賊も悪魔も其姿其人には其趣にて、正と申さねばなりません。然らば貴男は如何なる者で、如何なる立場にありますか。貴女は如何なる者で如何なる立場にありますか。悪人ですか、邪人ですか、それとも聖人ですか、人間ならば人間の立場がありません。子ならば子の立場がありません。親ならば親の立場がございませう。男ならば男として、女ならば女としての夫々、立派な立場がございませう。資本家、労働者、學校長、生徒、爲政者、國民と夫々の立場と、夫々の守るべき道がある筈です。人間として畜生にも劣つた様では致方がないではありませんか。草木よりも劣る様な事では致し方がありません。山は高く、谿は低く、火は上り、水は流る、風は動き、石は沈む、鶏は曉を待つて鳴き、鶯は春を迎へて初めて告げ、時鳥は夏に至つて叫ぶ、雁は秋に來りて

冬に歸る。櫻花は春に開き、紅葉は秋ざれば色を深うす。其秩序、其力用、其感果、其應報、各々正しく本分を盡す。何故に何故に、人のみは正しく本分を守り難いのでせう？

そうすると、それが人間の人間たる所以で、眞の人間味なんだ。正しくない本分が守れないと見るのは、著者の習癖で偏見だから、そう見えるのであると申す人もありません。然し私は其言葉の持主、または其思相の智者を、矢張り邪惡の一分と見るのであります。

日蓮上人は、ちのづから横しまに降る雨はあらし、風こそ夜半の窓は打つらめと詠じられました。正しかる可き道を、正しからじと思ひ迷ふ人は、これ聖人の出世を待つ悪魔の私語を、知らずして守るものであります。勿論一面から見れば

其身其儘が正しいとも申されませんが、其の人を憐れむのあまり、方便して不正と言はずには居られませうか。そこで此の立場、此の考へから一切の眞理を見ますれば、全部と二を以て分ち、一は正となり、一は不正となると言ふ斷定に歸するのであります。即ち正とは唯一なりと言ふ事になります。

諸て然らば何故に其理を明かす宗教に、千種萬様同じ様なものがあるのか御座いませうか。これ私のみかは、誰でも起す當然の疑ではありますまいか。

天理教では天理王の尊と申し、全基督教では神と申し天帝と申し父と申し、佛敎では佛と申し如來と言ひます。これ等は皆同一物の標準を指すのではありますまいか。同一理想を指すのではありますまいか。若し同一眞理を指すのでしたら何故に、其名稱が異なり、何故に其敎法が異なるので御座いませうか。若し同一

眞理を指すのでないならば、眞理に絶對一の名義を失ふのであります。此の時智もあり、賢き皆々様は即ち立ちて、斷じて申されませう。理想の一物は常在つものにして先天的であり、其名稱と敎法とは後天的に後から人間がつけたものである故に、所により人によつて異なるものであると申されませう。さうすれば名義が異なる故、識見に高低あり、識見に高低あれば従つて其敎法にも淺深ありは致しませんでせうか。若し何れも同じものでありましたら、何所の國の言葉に譯されても如何なる人に對しても、また何時でも同じ様な言葉にならないでせうか。若し同じになるならば、宗教は幾何ほどありまして唯一つではありませんか。何故に千種萬様の宗教がありますでせうか。若し同じにならないなら必らず、各々皆違つて居るでせう。異つて居れば差別が出來ますから、自然宇宙の眞理の唯一な

る推論に當て候められて、正と不正とに別れねばなりません。そして此見解より何所までも究めますれば、遂には必ず一正に歸してしまひませう。然らば此一正とは恁も何で御座いませうか。

不思議なる名目眞理の正中心

一切世間を見ますに、此等複雑無秩序觀の宗教に熱心に肩を入れて、一生懸命に擔ぎまはつて居る不思議な人の、なかなか少ない事を見せられます。能く安心して隨いて行かれると思つて、驚きます。これ全く知つて然るか知らずして然るか、唯事ではありません。中には人足繁き都大路の路傍に立つて、天日にもめげず、人々の慢罵の間をも撓ゆまずに宣傳して居る人もあります。或は地方を駆けまはりて絶叫して居る人もあります。或は寒さも厭はず、暑さにも屈せず、

ペンを走らせて紙上に宣傳して居る人もあります。或は命までも其爲めに投げて見榮も飾りも忘れ、慾も願も皆捨て、働らいて居る人もあります。或は食を斷ち眠りを止めて求めて居る人もあります。それに、それに、神佛は何故に正しき明かしを是等の人々に、下し給はぬ事せうか。恐らく世の中の愛と云ふ愛の中に基督教の神ほど愛の心のなき、神様はありますまい。凡そ通佛教の佛ほど慈悲の心のなき、佛様はありますまい。天理王や、大本教の神様ほど迷つた神様はまたとありますまい。儒道でも回々教でも、世間の一を除いて一切の宗教は、盡く皆其教理に反し、其理想にそむき、其主義を忘れてしまつて居るのでは、ありませんまいか。この一とは正これ一であります。

そう申しますと、それだから宗教が多岐多様になると、仰せられる方もありま

せう。誰だつて正しくないと思つて、信仰を進めてる人はないのだからと、申される方も御座いませう。それだから示さうにも、申さうにも、厭になつてしまふ。已に光明の臺に上つた人でありながら、若しは一人にても此言葉を、敢いて出さ方がありましたら、言語の徹せざるか、理の通せざるかと、全く一言の返事も出ない様に落膽してしまひます。

静かに心を沈め、思をつめて、安らかに考へられよ。一切の姿が皆悉く各々其の正しい姿で、正しい性を保ち、正しい作用を現じては居りましても、其れはその個々の一々について論じた丈げではありませんか。茲に若し假りにこの迷を晴らさん爲め、少しく筆を進めて、此の筆法論理をかり、推論しますれば、前に論じた様に木、山、石、川、人間と云ふ様に數限りない個々別々の絶對を認め、正

なりと致して考へて見ましても、遂には正が一に歸します事になりますので、即ち家と言ふ物につきましても、國家と言ふものにつきましても、世界にもまた夫々の、正しい姿と性と作用と、因果應報がある筈ではありませんか。宇宙にも法界にも正しい姿と性と作用等が、ある事になります。また具體的にばかりでなく、抽象的にしましても、即ち美と言ふ事にも、善と言ふことにも、義と言ふことにも、確かに夫々の正がございませう。そうしませば宗教にも、否とよ、眞理にも一つの正しい姿と性と作用等がないでせうか。若し無ければ本は有りながら今は無いと言ふ矛盾に、落ち入りませう。有りませう。有りませう。眞理にもありませう。宇宙にもありませう、世界にもありませう。國家にもありませう。家にもありませう。個人にも否とよ、木にも草にも石にも、海にも空にも日にも、

月にも乃自魚虫禽獸にも、一微塵にもありませう。然らば何でせうか。

それは真理の正中心で、凝つては一念の中にもひそを、發いては宇宙の萬象の中心ともなります、真理の正中心であります。

真理の正中心と申しましたら、必らず何をあはてたかと、御笑ひなされる方もないとは限りませんから、一言辨明して置ませう。勿論真理は宇宙法界に徧満した絶對で、中心もなければ何もないと言はれませうが、今一小微塵より、宇宙法界の大まで、皆悉く真理の顯現でないものはない。即ち、真理の名は個々別々の理を肯定して、名づけられたもので、言かへれば、真理を離れて事物なく、事物を離れて真理は認められないのであります。然して事物の絶對は已に認められたのであります。即ち個々の主觀から言ひますれば、是れが當躰の正中心なので

あります。今若し此顯現事物の正中心ばかりを認めて、真理の正中心を認めない人々は、これ部分の真理の眞のみ知りて、他の真理の眞を知らぬものとなります。それが若し彼と此との區別のないものでしたら、猶更論理が立たない事になるのであります。扱てまた、顯現事物にも、別に正中心など言ふ事なし、唯假りに中心と認め名づくると申されませうならば、真理にも唯假りに、中心を認め名づけて、示す可き便りとする事が出来ませう。

即ち、此所に言ふ中心とは、一言にして全躰を示し、一微にして大全を覆へ、一諦にして全事を貫ぬき、一事にして全極に通ずるの力用を、名づけて申しますので、それも如何にかして諸種の人々に、示さうかと思ふばかりに、用ゆる所の名言義辭であります。

阿彌陀でも大日でも阿閃でも、観音でも勢至でも不動でも、これ等は個々別々の中心正義は説いても、未だ真理の正中心は説かれませんが、基督教の神でも天帝でも、阿彌陀、大日等の如く個々の中心正義を表す名であり。殊に教法を以て論ずれば、漠然たる假説の人格にして、真理の正中心の實義は一つもありません。悉く皆曖昧漠稜の名ばかりであります。勿論、基督教、ソクラテース、孔子、等は正中心を信じ得た事で、また其力をも受けられた事でせうけれども、今時の人々の、都合上假りに信ずる者の外、真正の意味に於いて、能く信ずる者のないのも、言ひ換へれば真理の正中心に信入し得ないのも、決して無理ではありません。弘法、慈覺、法然、親鸞等の佛徒類や、基督以外のクリスト教徒等は、皆悉く個々の正義に近づくの外、餘儀なくされた實に氣の毒な人々であります。

況んや餘陀の宗教をやで、回々教でも猶太教でも、婆羅門教でも乃至は、天理教や大本教でも、同様に、或は此上もなき憐愍の情に堪えませんが、儒教も善い教ではございますが、宗教と申すよりは俗世間の道徳で、宇宙の真理の論求には、先づ關係が薄いものと、せねばなりません。せめて言ひますれば、太極と立つるのでありますが、是れ字の如く、全く假りの名字で、決して正中心の實義は少しもありません。已上述べました外の小分教等には、此眞實義を顯はす名字すらも、ありません。例令無理に名づけましても萬民及び世界を救ふ力とも姿とも、なり得ますまい。其等は煩はしく論ずる迄もない事で、讀者諸仁の賢明なる見識判別にお任せ致します。然らばその真理の正中心とは、そも如何なるもので、何所に存在致しませうか。

驚く勿れ。光明の本體

今迄論じました心理の正中心！それは唯此の宇宙法界に僅かに一つあります。是れ即ち釋尊の説かれた、獨一本門の光明の本體、妙法蓮華經であります。是れ即ち眞理の正中心の名義であり、主體であり、作用であります。そればかりか、これが全性命であり、またそれが教法となつて居るのであります。日蓮上人御義口傳に言はく。

妙とは法性なり、法とは無明なり。無明法性一體なるを妙法と言ふなり。蓮華とは因果の二法なり。是れまた因果一體なり。經とは一切衆生の言語音聲を經と言ふなり。釋に云く、聲佛事をなす。之を名づけて經と爲すと。或は三世常恒なるを經と云ふなり。法界は妙法なり。法界は蓮華なり。法界は經なり。蓮華とは

八葉九尊の佛體なり。能く能く之を思ふべし等と云々。

眞如の朗月に、無明の萬象は照らされて、善極莊麗の活作を現ずる姿、因縁具足して、蓮華の清艶、顯に密に義を説明する所、別しては因果に名づくる、妙觀察智拳の覺悟、情非情にわたる一切衆生の聲を以て、教と體達する底の者でなければ、誠に三世常恒にして變りなく、十方無邊にして涯りなき、眞理の名とは言はれません。

或人は或理想を奠めて、これに依憑し、其の者を通して眞理を見ると言ひますが、勿論それも必らず一種の見方には、違ひありますまいけれど、何ぞ必らずしも修徳の聖者をかりて、殊更に煩はす必要がございませうか。大日如來を徹して眞如を見るも、阿彌陀佛を頼んで實際界に入るも、クリストを通して、眞理を究

明するも、皆同一道程の異見に過ぎないではありませんか。もつとそれをつき進めて参りましたら、濱の真砂にも、寄せ来る波にも、其性命はあります。されば或者は岐路に立ちて泣き、或者は白糸を見て悲しみ、或者は野百合の一片に、ソロモンの榮華の夢を啣ち、或者は飛鳥川の淵瀬に、昨日の夢幻を悟つたではありませんか。何ぞ特別に聖者をかりて、然かも色々の儀式まで擧げて、煩はしく行ふの必要がありませうか。こゝに若し、それは衆生の機根が違ふから、其方法も違ふと申される方がありましたら、然らば其様な法を宣傳するのは、返つて人を迷はす方法となりませうと應へませう。言へ換へれば自然に擴まるのはよいけれど、他人にすゝむる事、人爲的に擴むるのは非常な罪惡となる理由であります。また唯に眞理の理を悟るの方法として入り易き方法なる故にと、言はれる方あ

らば、また答へん。オ、野百合よと申すことが、アーメンと言ふよりも、いかに切實で、いかに實際に入り易いか、知れないではありませんか。また南無飛鳥川と云ふ事が、南無阿彌陀佛と念ずるよりも、幾倍の價値があるか知れないではありませんか。大日でも薬師でも、観音でも勢至でも、何教によらずぞうではありませんかと。其餘は押して知るべしであります。またそれ等の人々は、皆是程の聖者に向つて求めて居るばかりだから、猶更可笑しくてならなくなりませう。而かも其求め方が、拙劣卑陋で、ラビラビと唱ひ乍ら、クリストの言葉を消したり削つたり、添へたり加へたり、勝手な眞似をして居るのですもの、何所に信順の心が見られませうか。誠の信ならば死ぬまで、其教に忠實でよく守らなければならぬ筈ではありませんか。南無阿彌陀佛と申し

乍ら、阿彌陀佛の教をも守らずして、阿彌陀とは誠の佛と言ふ義なりなど、勝手な理屈をつけ、法華經の壽量品の文などをつけて、無量壽命など、五百塵點までも盗みつけて、返つて俎の上で本尊を解剖する様な、奇險を敢てして居るではありませんか。また名にしましても、唯人の名や物の名が、外ばかりの假のもので内容がなければ、其名は決して實名になつては居らないのであります。例令ば正義と云ふ人は必らず正義の人で、忠義と云ふ人は必らず忠義で、正直と云ふ人は必らず正直だとは、言ひ得ますまい。實質のない、或は本性を奪つたもの、名前に、何の力がありませうか。其上何と思つて特に釋迦の壽量を、阿彌陀につけて吹聴するのでせうか。何故に明らかに、正直に、ありのまゝに、現はしてはいけないでせうか。何故に斯かる不正直をせねばならないでせうか。

其人々の遵守して居られる教條の中にも、『我を召びて、主よ主よと、曰ふもの盡く天國に入るに非ず、唯これに入るものは、我が天に在す父の旨に遵ふもののみなり』(馬太傳七)ともあり、また『もし我れ佛を得たらんに、十方の衆生至心に信樂して、我が國に生せんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺をとらじ、唯五逆と正法を誹謗するとを除く』(無量壽經四十八願の中第十八願)ともあります。これ等は唯現今最も世に行はれて居る、未だ息のありそらな、人の迷へそらな、宗教故に例を擧げましたが、其餘の一切の宗教道徳は全く例を擧げる必要もありません事で、大方は讀者諸氏の御判斷にまかせます。

唯我が天に在す父の旨に遵ふ者のみとは、いかなる人を申しませうか。唯五逆と正法を誹謗する者とは如何なる人を申しませうか。此れ等を明らなずして、信

仰するは、灰を覆へる火を搦むよりも奇險ではありませんでせうか。要するに、父の旨と正法とが、此事件の最も注意すべき、要點中の要點であります。

心淨き者は幸なり、神を見ることを得べければなりとは、神を見ると云ふことよりも、心淨かれとの御垂誠ではないでせうか。

執着には色々の種類がありまして、それに執着すると、實際の事がわからなくなりまます。往昔、或國の王様が象を一匹連れて來させまして、盲人を多勢集めまして、象は如何なる種類のものかと尋ねました。盲人どもは夫々、象のそばに参りまして象を擦つて考へました。其中の一人で、象の牙にふれた者が言ひました。象は木の根の様なものでございまして、それから、耳に觸れたものは、象とは箕の様なものでございまして申しました。其頭に觸れた者は、象とは苔の生いた石

の様なものと申しました。其鼻にふれた者は、象は杵の様なものと申しました。其脚に觸れたものは、象は木臼の様なものと申しました。其背に觸れた者は、象は寢床の様なものと申しました。其腹に觸れた者は、象は甕の様なものと申しました。其尾に觸れた者は、象は太い繩の様なものと申しました。

皆て此盲人共の見たり即ち感じた象は、一つも眞正なものはありませんでした。其觀察した範圍で、これに種々の憶測を加へて連想し判断したものでせうけれども、随分無邪氣な失敗だと思ひます。今迄の既成宗教も亦復これと同様ではありますまいか。眞に世を警しめ、社會を覺まさんと思はるゝ人々は、再考三考して見られてはいかいで御座いませうか。斯く申すのも誰の爲めではない。全く貴下の爲めに申したのであります。

此譬には此底にかへれた、深長な法理が伏在して居ります。然しそれ迄は此書で申し述べません。何故なれば、述べなければ慳貪の様にも見えませうけれど、その私一人の罪よりも、述べますれば當然来ります悪影響、即ち賢しい現代人の思ひの胸に、萌ゆる何物かの罪の大なる事を見るからであります。若し眞に道を求められる方あらば、親しく御來會下さいませ。少なくとも光りの友となつて、共に俱に、無窮の進路を開打致したいと存じます。

勿論、斯くは申しましたが、なほ各宗各教の信徒の方々が、各自絶對なりど叫んで、能く順信の一念は禮拜して居る姿を見せられましたり、または美しい徳を守り、華やかな心地で世の爲め、人の爲めに活動なされたりして、居られますのを見せられたり致しますと、唯尊い感じが致しまして、常に恍惚と致します。

けれども、それと殆んど同時に、私の眼には、床の生花か。ペンキ塗りの家か。無草の水の上に浮んで居る様な、心地がして頼り少ない、淋しい涙がにじみ出るのであります。

其所で此眞實には、遠い離れた様な觀察を下すに到つた、此等の盲人の心持と立場と智慧とを、親切に考へて見ますれば、其所には、色々の局見の執着と、修行の懈怠と、智見の淺薄と、輕卒と、無責任の觀念との、五つの缺點を見ることが出来るのであります。先づ牙ばかり觸れて、脚にも腹にも觸れず、腹ばかり觸れて牙にも尾にも觸れないと言ふのは、また一部分づ、分々に觀察したばかりではなく、熟考もなかつたと言ふのは、確かに修行の上から見て懈怠と言つてよろしく、智見の上から見て淺薄と言つてよろしく、態度の上から見て輕卒であつた

と、言はねばなりません。それに局見の小さな學解の執着を以て、大王の仰せなるにもかゝはらず、責任を重要視しなかつた點は、前者は見る者にとりて、僞慢の罪となり、後者は見らるゝ事件について、無責任の罪となります。

此等盲人の答へを、全部総合すれば、眞實の象は知る事は出来ずまいけれども、大躰に於いて象の形らしく、なるではありませんか。今時の宗教を信じ、或は解し悟り論じ講ずる方々や、哲學を學び科學を研究する人々は、多くは此盲人の部屬を離れないではありませんか。個々の精靈、別々の佛性について觀を進むる人々は、先づ此弊に墜ち易い事ではありませんまいか。杞憂にて濟めば、また大菩提道の爲め、幸福であります。

然るに我が、妙法蓮華經ばかりは、眞理の正中心であります。唯佛と佛とのみ

乃し能く、諸法の實相を究め盡し給へり。所謂諸法の、如是相、如是性、如是躰、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等なりと、説かれてあるを見ても、要を以て之を言はば、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆是の經に於いて宣示顯説すと説かれて、あるを見ても、汝等諦らかに聽け、如來の秘密神通の力をと説かれて、あるを見ても、明らかに眞理の正中心を示して居る事が、知れるのであります。尤も今示しました意義は、到底局見の人々には解りますまい。然しながら、讀者千億萬人の中一人にても、著者の胸中に入る人ありて、道に進む人あらんに、若し此事を示して置きませんければ、定めし子の母を見ない様な渡河に舟の見えない様な感じが致すことゝ存じ、文底に秘してほのかに片鱗を現

はして、雲間の大龍をうかいはせるのたよりと、するのであります。唯徒らに不親切と言はないで下さい。仰げば見ゆる月影を、言はずば聞こゆる梵音を、見もせず、聞きもせず、不平を言はい、誰かこの人を正氣の沙汰と申しませうや。

闇と光

嗚呼然れども十方の聖賢智者は、私の此の振舞をお笑ひなさるでせう。定んで御憐れみなさるでせう。其故は、甚深微妙の法は、見難く了す可き事難しとも説き、また是の法は示す可からず、言辭の相寂滅せり。諸の餘の衆生類は、能く解するを得る者有る事なし。諸の菩薩衆の信力堅固なる者をば除く。諸佛の弟子衆にて、曾て諸佛を供養し一切の漏も已に盡して、是の最後身に仕せるごとき。是の如き諸人等すら其力には堪えざる所なり。とも説かれ。また假使世間に満ちた

る者、皆舍利弗の如くにて思ひを盡して共に度量すとも、佛智は測る事能はじとも説かれました。また正使十方に満ちたる者、皆舍利弗の如くにて、及び餘の諸の弟子も亦十方の刹に満ちたるが、思ひを盡して共に度量すとも、亦復知る事能はずとも説かれ、また辟支佛の利智にして無漏の最後身なるが、亦十方界に満ちて、其數が竹林の如くなるも斯等が共に一心に、億無量劫に於いて、佛の實智を思はんと欲すとも、能く少分をも知る事莫けんとも説かれました。また新發意の菩薩ども、無數の佛を供養し諸の義趣を了達して、又能く善法を説かんもの、稻麻竹葦の如くにして、十方の刹に充滿せんが、一心に妙智を以つて恒河沙劫に於いて咸く皆共に思量すとも、佛智を知る事能はじとも説き、また無漏不思議の甚深微妙の法をば、我今已に具へ得たり。唯我のみ是の相を知れるのみとも説かせ

られ、また世尊は法久しくして後、要らず當に眞實を説き給ふべしとも説かれたからであります。斯かる説き得ざる法を説く故に、言辭に盡し得る事でない爲め定めし輕賤憎嫉する者も出來ませう。然し先聖は語を續いで、我れ苦縛を脱し涅槃を逮得せしめたることは、衆生の處々の著、之を引いて出づることを得しめんとてなりと、仰せられました故、先佛の法を受けて、世間の人々に示さん爲めに申す、法門義辨であります。而して今の此經の佛と、大日、阿彌陀等の佛とは、佛が違ふのでありまして、其故は佛教の世に出で、より茲に三千年に近く、其間に色々の人が出て色々に解釋されてありまして、其爲めに餘佛に隨は、此經を見聞修學出來ないからであります。さればこそ是の、眞理の正中心を知らぬ餘諸の宗々を、天台大師責めさせ給ふに、天月を識らず唯池月を觀ず云々と申されまし

たのであります。これで眞理の正中心説も、大抵不可思議の思議を以て、解了する人も少くはない事と、存じますけれど、今其證據を擧げて、猶疑惑の止まぬ方々に御知らせ致し度いと存じます。

法華經の終りに、此方等經は是れ諸佛の眼なり、諸佛はこれに因つて五眼を具することを得給へり。佛の三種の身は方等より生ず。是れ大法印にして涅槃海を印す。此の如き海中より能く三種の佛の清淨の身を生ず。此の三種の身は人天の福田、應供の中の最なり等云々。また曰はく乃至方等の義を思へよ。一日乃至三七日、若は出家在家にても、和上を須るす、諸師を須るす、白羯磨せざれども、大乘經典を受持し讀誦する力の故に、普賢菩薩助發行の故に、是は十方の諸佛の正法の眼目なれば、是の法によりて自然に、五分法身、戒定慧、解脱、解脱智見

を成就す。諸佛如來は此の法より生ず、大乘教に於いて記別を受くることを得給へり等云々と。

此等を以て思ふに、佛眼を得るも是經なら、法、報、應、の三身を得るも亦此の經であります。況んや正法の眼目であり、是の經の故には、自然に五分法身を得るとも、説かれてあるではありませんか。

名月天に沖すれば、自然に千水萬江にその影を浮べ、春季到れば告げざるに、百花の開敷するか如く、妙法蓮華の朗月出づれば、衆生の萬水知らずして、如來の影を宿し、聖人出器の時に遭ひば、告げざれども、自然に菩提の百花開敷するを、見るでありませう。即ち眞理の中心なれば、宇宙法界の大根本、大眼目たるのみならず、ありと在らゆる事々物々に、其面目を現はし、認識絶對界の權威を

獨占するのであります。さればこの妙法蓮華經に歸命一如する時、名義に其大功德が存するを以て、知らず識らず、大菩提海に流入する事が出来るのであります。依つて正直に、諸餘の經教宗流を捨て、眞實淨潔の大法に歸命し、南無妙法蓮華經と、唱ふる者は、例令惡人と雖も、必ず當來に成佛を得るであります。即ち精進して順信せば、なほ速やかに其境地、即ち妙覺果滿の域に、達し得るのであります。そこで餘の一切の宗教は、此一實の爲めに其活動を止めねばなりません。尤も止めるなど申ししても、誰れも信する者が、自然になくなる道理であります。其故は太陽出で、提灯の用はなく、月夜に松火の力をかりるの必要がない、理由だからであります。

近時の様に人の正義觀念が、益々明らかになり、學問が日に月に進んで参りま

すに従つて、勿論、邪智心ばらも必らず出るではございませうけれど、それを表裏して必らず、正義の士が出で、それに眞實の教が出ますれば、自然今迄の様な宗教などは、朝日に霜のとけ行く様に、薪の盡きて火の滅する様に、太陽の出で、星の光りの消え行く様に、濡れたる紙の乾くが様に、光りの闇を照らすが様に、逐々に消えて跡なく、成り行くであります。

如何しても、いちけて迷信がしたければ、南無妙法蓮華經と唱へ乍ら、泣き泣き迷つたらいえでせう。何としても耶蘇の教を、見聞き讀み行へたければ、南無妙法蓮華經と唱ひながら、バイブルを讀んだら好いでせう。どう考へても阿彌陀經が見たかつたら、南無妙法蓮華經と唱ひながら、見たら好いでせう。勿論言はずして明らかかな、大變則ですけれど、止めよと申し聞かせても、止めもせずまた

反對もせず、實際やつて居るのですから、致し方がありません。またどうしても捨てられず、正しきにもは入れなくては、後來まで苦しむ種で心の樂しみを得ることが、出来ませんから、悪い夢の醒めるまで、お讀みなさいと申したのであります。然し、此間に唱へた、妙法蓮華經は眞の價値がありません。殊にそれに狂れて眞理に歸る事を、忘れてもし様ものなら、何にもなりませんよ、宛かも香と糞とを、同時に焚く様なものでございます。御氣の毒ではございませうけれど、此間だけは、どうしても正しい眞理は解する事は出来ずすまい。

今の様な、五濁亂漫の世の中にも、なほ一心に佛を見奉らんと欲して、自から身命を惜しまず、妙法華經を修行して居る人もあります。正直に、一心に、懸命に、日々夜々に活動をして居られますのに、多くの世の人々は、耳がないのか、

聞こえない様子、眼がないのか、見えないらしふございます。中には何の理由もわからぬ癖に、嫌がつて居る随分おかしな人もあり、或は少しばかり法門の端を嚙つた位で、有頂天になつて籠で海鼠の反對をして居る人もあります。

これ等は雙方とも、百歩にして五十歩を笑ふ、亞權流の達人と見えます。

既に唱ひ得たる人々よ、畏るゝ事勿れ、憂ふる事勿れ、今當に如來の出現まします可きの時は、近づいて居ります。御覽なさいませ、世界の太勢を、

日蓮上人は立正安國論に諸經の要文を記して、明らかに示されたではありませんか。其中の大集經には、兵革の難と、疾疫の難と、穀貴の難との、三の不祥事ありと、説かれてあるではありませんか。五ヶ年にわたつた、全世界の大戦亂はこれ、不可思議な兵革の難ではありませんか。また全世界を覆つて二三旬日にし

て、閻浮提の衆生を包み終つた、流行性の悪感冒は、是れ不可思議なる疾疫の難ではありませんか。見られよ、露西亞の食物運動を、英、獨、佛、伊、米、等各國諸地の穀物問題を、否とよ、淺ましき暴動を!! 何とか見られますや。其性質の如何を質すことよりも、先づ其の前に不可思議な穀貴の難と、言はねばならぬ不幸に思ひ及ぶでは、ありませんか。

麒麟出でしかば孔子を聖人と知る、鯉社鳴つて聖人出で給ふこと疑ひなし。佛には梅檀の木生えて聖人と知る、老子は二五の文を踏んで聖人と知る、とは實に日蓮上人の御文であります。世亂れて聖賢現はれ、家貧しふして孝子出づるは、何所も同じ、三世の掟ではありませんか、パリサオの學徒、貪りし時にこそ、クリストは出で給へ、羅馬法王廳の亂れし時こそルーテルは出でられたのではあり

ませんか。外道九十五種あり、蘭菊の美で、衆生の精神迷へに迷へし時に釋迦佛は出で給へ、論釋山と積りて、天下歸趣に惑へし時、天台大師出でられ、修行已に衰へ世は法滅の影暗く、鬪淨地上にはびこり、道統將に頽廢の時、邪滑なる學解を叱咤し、怙息なる方便を破りて、日蓮上人は起たれたものではありませんか。今や豫言者は、宛かもクリストの再來を俟つが如く、日蓮上人の御再降を仰がんが如く願つて居ります。或る者は東の方に御魂出づべし、其時神は手を引くなど、言つて居ります。また斯かる豫言などは何れにしても、若し聖人茲に出で給はずば、此濁亂の代をいかにすべき。誠に人事ならず心細い次第ではありませんか。いつも時代が聖人を作るものか、聖人によりて時代が指導せらるゝものか、不可思議、不可解の時にばかり、現はれ給ふのが聖人の慣例であります。また此

時も然して、出で給ふのかも知れません。俟つべしであります。

一葉落ちて知る天下の秋、一花を見て春を推せよ

然して扱て、天下の秋は唯に龍田川の水上にばかり、來るものではありません。眞理の動靜は、唯一人の覺悟に止まるものではありません。同じ様な洞察の人が、あちらにもこちらにも、なかなかに出られるもので、時も殆んどいつも同時位なものであります。東西古今の先哲中には、これを時とも時の流れとも、機會とも運命とも申された様であります。時代の相應はしい文句を用えますれば、時の流れ即ち時代の潮流、其れは總じて一切の事々物々を支配して、遂に依つて到達すべき終極に結びつけらるゝものであります。これを古往の宗教家は、多く時と言ふ意味の言葉を以て、示された様に思はれます。

これを客觀的に見て機會であり、主觀的に見て因縁果報とも申されませう。そは何れにしても、今迄の事例から見ると、一聖の統一には、他の一切が自然天然と、順ふ者も違ふ者も、守る者も逆ふ者も、前に出でし者も、後に來る者も、心あるも心なきも、一時に其一聖を中心として、天地法界を大舞臺として、幕を開くものであります。そして随分長い壽命を保つものであります。

先づ釋迦の印度下生も、九十五種外道がなかつたら、殊には提婆達多や、阿闍世等の反對がありませんでしたら、また舍利弗、目犍連、迦葉、阿難等の弟子がありませんでしたら、また諸大王者や、諸大富豪の歸順がありませんでしたら、今に如何なる史蹟を、遺した事でせうか、クリストも、パリサイの學徒がありませんでしたら、殊に羅馬の反對と慘忍がありませんでしたなら、またまたユダの

逆神がありませんでしたら、またペテロやヨハネの歸依、信仰がありませんでしたら、恐らくは今の世に行はれて居る、西曆の年數も異つた數字で、表はされて居たかも知れません。

殊に驚ろかないで居られない大事實は、七百年前に、日本國安房の小湊に孤々の聲を擧げられた、日蓮聖人の御事蹟であります。二千餘年の其昔、印度に説かれた神話の様な豫言が、支那里數萬八千の、東北の小國にして、一々事實になつて現はれた、舞臺面の活躍！そう申しましたら、あまり暢氣な様に、聞かれる方も御座いませうが、日蓮元より存知の旨なりと、苦難を的にしての、骨を挫き肉を削り、血を浴び涙を潤らす姿は、七百年前の事とも忘れて、自らも舞臺面の人となり、聖人の御跡を慕ひて狂奔する様の心地にさへ、なる位であります。

主觀的に言ひまして、釋迦佛が歸納的眞理示現者とも、申しませうなら、日蓮聖人は演擇的眞理實行者とも思はれ、若し客觀的に見て、釋迦佛が演擇的眞理示現者とも、申しませうなら、日蓮聖人は歸納的眞理實行者とも、申し上げ度い様な、不可思議な事實に、忙然として自失し、再び啞然として、闇倒するのであります。先づ讀者諸氏は、假りに日蓮聖人の御身の上となつて、御考へなさいませ。小町の辻説法、立正安國論の奏上迄は、修行實行の計畫として、豫定行動と定め皆様各位の御判別に委すとしても、一度伊豆の伊東に流されて、俎岩に立たれた時には、見ず知らずの船守彌三郎を、電話で呼ぶ都合も、つくまいじやありませんか。今の世の少しばかり、法門を嚙りました米虫共が、日蓮上人の御一代を判別して色々の論を構ふと聞く。日蓮上人を知らないのも恥の中の恥なら、あま

り知り過ぎて、忘るゝもまた大なる恥の中の恥と存じまして、斯くは示します。決して聖人としては、これ等の大難を何月何日に此難が来て、何時の何日に赦されてと明らかに、豫知せられたとは、思はれない。またその様に暗合されてあつた事では、但の芝居で、少しも活きた力も出ないではありませんか。決して何時までが序分、何時までが正宗分と、初めから分けられて居たのではありますまい。御一代の法門義別、これは皆後に顧みられて仰せられた事であらうと存じます。伊東朝孝が病氣になつて、歸正する段取りまでには、凡人には堪え得ない、かなりの日程を、過して居るではありませんか。それは假りにも堪え得たとしても、小松原の難、小町の辻、松葉ヶ谷の焼打には、全く刀杖瓦石の雨霰、吹雪と散つた經典色讀、龍の口にて刃を折りましたのも、佐渡の三ヶ年を見徹されたか

の様な行貌も、何うして豫測されませうか。千町歩の寄進に、愛染塔の別頭と、幕府も随分、人智を絞つた様ですけれど、雪を噛み鹿皮をまとへ、木の根を枕に草に臥させ給へての經行攝黙、何れ聖人としては、勿論如何なる難儀も、風の前の塵と思はせられたでせうけれど、景信、良觀、賴綱等、少輔房、相性房等の反對は、よくも經文に示された通りに、出て來た。それも信じた人々ならば暗合でとも、思はれない事もありますまいけれど、經文など一句も知らぬ者で、而かも心から日蓮聖人には大反對の者共が、珍らしくも、あの様な活劇を演じましたのですもの、驚ろかすには居られませうか。私に案ずるに、釋迦佛よりの付屬も、さる事乍ら、我等が修行に約して見る時は、これ等の正行は全く、純なる信仰によつて體得された事と、深く思ふのであります。全く正しい信仰の正しい道行で

はなかつたでせうか。

勿論、釋尊御座世中の豫言の適中や、正法壹千年内の、付法藏の二十三四人の事や、像法壹千年中の天台、章安、傳教、義真等の藥玉、藥上の付屬などの過中行果、隨の煬帝、日本の桓武天皇等の妙裝嚴の歸信因縁も、不可思議微妙の運行には違ひありません。日蓮上人出で給はずば、私様の寢そびれ者には、どうして眞理の正中心としての、妙法蓮華經を、辿り得ましたらう。到底、思ひも及ばぬ事で、それを能く善く思ふと、心の戰慄を感せずには居られません。即ち、妙法蓮華經は、眞理の妙名でありますから、いつ迄經ちましても、滅する事がありません。いつから始めたのが其始めも知れません。單なる物質や精神には、増も減も生も滅もありません。此眞理にはありません。例令ありま

す様に思はれても、其まゝが眞理ですもの、全く不増不減不生不滅不任不懷不空
 不有であります。此の本體、眞文の温かき御胸に懷かれて、思ふ様泣いても見ま
 せう。心の限り笑つても見ませう。情にまかせて訴へても見ませう。聲にまかせ
 て叫んでも見ませう。手をも舉げ、足をも浮かせて舞つても見ませう。觀喜にま
 かせて躍つても見ませう。暖かき、親しきみ胸に懷かれても見ませう。喜びに疲
 れて眠つても見ませう。全く一身をこの慕つかしき父に任かせて、生かされるの
 も殺されるのも、爲さるゝ儘にお委せもませう。

また或時は極善の道に叶ふて、極美の景色をも、見物にと出掛けても見ませう。
 常樂園の春の花、我淨の風にぞよめいて、落華の雪をも身に浴びよ。三伏盛夏の
 慈悲の雲喜捨の惠の露うけて、悟入の蓮華を坐に敷けよ。眞如實際の秋の空に三

諦止觀の月冴えば、淨信不退の水ためて、覺悟菩提の景を見よ。破折の冬に風凍
 り、大慈の雪の舞ふ宵は、六龍躍るとうそぶけよ。

小兒乳の味を知らざれども自然に身を益す

幸も不幸も健康も病氣も、富貴も貧賤も、學問も研究も、労働も資本も、肉躰
 も精神も、皆共に眞理の名ですから、妙法蓮華經に、歸入しさへすれば、一とし
 て其心のまゝにならないものは、なくなりませう。

幸の人が不幸にもなります。不幸の人が幸福にもなります。健康の人が病氣に
 もなります。病氣の人が健康にもなります。富貴が貧賤にもなりますし、貧賤が
 富貴にもなれます。學術研究の奥義を極める事も、易くなりますし、労働をして
 も、不平もなくなり、また疲勞も嫌怠もなくなります。資本しても、失敗成功思

ひのまゝになり、肉躰も、精神も共に願のまゝになります。唯時によりまして其願が叶ふ事が、少し長くなる事もあり、また直ちに叶ふ事もあります。それは即ち、其願の因縁果報によるのでありまして、言ひかへれば前々の、善き習慣を用ゆれば、早く思ふまゝになり、誤つて悪い習慣を用ゆれば、其習慣が善い方に向く迄の餘分の時間が入りますから、少し長引くのであります。而しいかなる願も叶はないと言ふ事はありません。それで或種類の人々は、祈禱を迷信と笑はれる向きもありますが、よく考へて見ますと、生きとし生けるもの、もつと詳しく申しますと、情、非情の宇宙の萬有全部に互つてですけれど、其の中で祈禱をせぬものはありますまい。それは、合掌や拍手や擧手と言ふ様な、色々様々な態度に現はれた祈禱は、ありますまいけれど、祈禱と言ふ事は希望の表はれですもの、

希望がなければ、生滅もない筈、生滅なければ、斷もなく従つて常もなく、偏空に歸するのでございますもの、諸行無常であり、是生滅法である以上は、希望も必らずある理由で、従つて祈禱も必らずある理由であります。賽錢など上げて願ふ身心の様子や姿を、笑ふのかも知れませんが、本人としては、或は他人に明かされぬ懺悔があるかも知れません。或は思ひにあまる悲哀があるのかも知れますまい。これ等は、純真な其個性の信仰として、全く絶對でありまして、決して笑ふべきではありません。勿論眞如は其根本病に對して、正しい應報返答を與へらるゝばかりなのであります。

即ち譬へて言へますれば、或賭博の親分が、掛け事の成就を祈ると致しましたら、神佛即眞如は如何に應へられるでせうか。其機根に應じて一度や二度は、た

とへ、其者の言ふがまゝに、願を叶へられたとしても、これは後に奪はんが爲めなのでありまして、遂には其者並びに社會の、勞作なくして僥倖を糧とする様な、過れる精神を悟らしめ、除かしめ、生涯正しい勞作に従つて、着實な職務に就かせる様に、仕向けらるゝのであります。此事實を知つて、未だ知らずして迷ふ者に、示さんと思ふ時右の様な訓誡となるのであります。即ち、

妖孽に福を見るは、其惡未だ熟せざればなり。其惡熟するに及んで自ら罪虐を受く。禎祥に禍を見るは其善未だ熟せざればなり。其善熟するに至つて、必らず其福を受く。と、斯く申しませば、大抵の人々は堅苦しい道學者ずりの僻論と思はれるでせうけれど、これ等は古往今來、随分と多い實例を殆んど毎日の様に、幾千幾百となく残して居るのであります。腕力や、金力や、意地や我慢では、

到底動かす事の出来ない、事實なのであります。唯大抵の迷子は一時的に、盛榮し、昌隆する有様を見、または陋巷に燻ぶれる衰頹、廢亡の跡を偲んで、善い事ものにならず、悪い事も定んで罰なしと見るので、ございしますが、是等の情の陰には正を嫌ひ邪に親しむの、恐ろしい業病菌が芽ばえて居るのに、氣がつかないのであります。一時的幻影の爲めに思ひ惑ふ姿は、わづか五年十年の樂しみの爲め、女に迷へて可惜一生を蹠く姿や、僅か一年か二年の流行を追ふて、虚榮に泣く人々の有様に、髣髴たるものであります。

斯の様に眞如は、其病の源を治せんがため、必らず結縁せしめる必要がありますから、色々の方便を用ゆるのであります。之れが即ち、煩惱即菩提の轉回初門であり、また生死即涅槃の第一階段であります。

そう申しますと、少しも願は叶はないではないか、と言はれる方々が、澤山にある事と思へます。凡夫の目や耳で見たり聞いたりした所では、確かにさう思はれませう。これは素人には病氣の根源がわからない為なので、若しそれが誰にも彼にもわかる位なら、別に大きな病院も入りますまいし、醫學博士の研究室も皆無用じやありませんか。祈禱もそれと同様でございまして、或人が幸福を祈るとしましても、十年二十年の將來をよく見徹されて、一時色々な試みを受けるのを知らずに、反つて一時善さそうな、形を示されて一生煩悶に送る悲痛な、祈禱を好むならば、こは決して正氣の沙汰とはどうしても、受け取れません。

今此の譬喩の賭博者は、病氣を懈怠と貪慾と言ふ、外見には見えないけれど、随分大きな二本の疝氣筋に、故障がありますので、此の掛事満足の願は、神佛の

良醫の耳へは、何卒此疝氣筋の病氣を直して、安樂を得る妙薬を下さいと云ふ様に、聞こえますのです。病人を憐れむ親切な神佛の良醫は、其容態の都合によつて、薬を調合し様じやありませんか。

素人禪家の應病與薬や、念佛真言のおなぐさみ信心や、クリスト教徒の個性平等の信仰は、何でも彼でもお構へなしで、例令ば胃病で菓子を食べたがる子供にでも、死んでも病んでもお構へなしに菓子と與へる様な、愚かな親と一般、誠に天月を識らず、池月をつなぎといめんとする猿猴が輩の行爲と同様で、何と笑はれても致し方がありませんまい。

此外の一切の宗教は、本より論題に上る價值さへないので略して置きます。そこで何れにしても、祈禱を許すとせば、一般他宗教の淫祠邪教と同様に見

做される、即ち妙法正信の立場を、危くする怖れがあると、仰せられる同行の方
 方も、必ずお有りのことと存じます。然し御安心下さいませ。日出で、星翳るの
 例で、眞實甚深秘妙大法、眞正理の正中心の祈禱が出来ますれば、既成宗教等の
 禮拜祈禱は、昨年の曆、昨日の食であります。いかなる祈禱でも少々は、叶ふこ
 ともそれはありませう。烏でさへ、一日の吉凶を知ると言ひますもの、また提婆
 達多が教も二百年が壽命を保ち、四個格言の大破折を蒙つた邪宗さへ、七百年な
 ほ、腐りつゝも、續いて居りますもの。然しこれからは、今迄とは世の中が全く
 異つて居りますから、仲々に正しい學者も出られず、心淨き方々も、四方に
 雲の様に群がり起つて居りますから、諸種萬様の祈禱が、合掌唱題に變るのもあ
 ながち、遠い事もないだらうと、悦んで居ります。そして前に申して置きました

様に、心の病が愈りますれば、身の病も自然平愈する理由でございます。即ち心
 の自由が得られさへしますれば、身の自由不自由にかゝはらず、苦しまなくなり、
 心の満足さへ得られましたら、外からは如何に見え様とも、内心には不足はない
 筈だからであります。

抑々病氣には大別して二種ありまして、一は身の病、一は心の病であります。
 身の病に五つ、一には水によりて起るもの、二には風によりて起るもの、三には
 熱によりて起るもの、四には雑病、五には客病、でございます。五の客病には四
 通りありまして、一には非分強作、二には妄誤墮落、三には石杖瓦石、四には鬼
 魅所著等であります。心の病には四通りあり、一には踊躍、二には恐怖、三には
 憂愁、四には愚癡であります。(涅槃經、聖行品所説)。

これによりますれば、現今の醫術以外に、確かに病源ありと見るのであります。また實際にしましても、醫師の手腕にては治し得ぬ病のありますことは、實證せられる事で、またそれ等の病の中には、不思議にも祈禱で癒りました定證實例も、尠くないと聞いても居り、また自らも見、經驗も致しました。即ち

妙法蓮華經藥王品には、此の經は即ち爲め、閻浮提の人の病の良藥なり。若し人病あらんに、是の經を聞く事を得ば、病即ち消滅して不考不死ならず等と、説かれてあります。此病と言ふ意義には、非常な深いわけが包まれて、居るのでせうけれど、また身心二病も含まれて居るに相違ありません。

全く過去には何の苦しみも見事なく生れながら健全なる身軀を享けました人にして、病む者に同情し憂を分つなど言ふ事は、出来難い事には相違ありません。

い。病氣は心の横着か、無懶漢の遊び口實の様に見て、病者を笑つて居るのも決して、無理ではないかも知れませんが、若し斯かる人が、一朝身軀病みて立つ能はず、朝夕苦患に悩む様な時が、來ましたら如何でせうか。共に歌ひし友も訪はず、俱に語りし人も來らず、幾春秋の徒然を、藥湯と親しみ病褥にうめく、身の哀れさを是非もなく感じ受けた時、此人の心の中は果して如何でせうか。

此の人の昔他人の病に情無かりしと同じく、之れを觀じ、或は唯因縁なりとか此かる果報なりとか、冷淡に學理や法門で即斷して、顧みられなかつたなら、或は但單なる不經濟の浪費者と見られ、または貪慾なる藥醫が、弱肉強食の標語で多額の金圓を、強請されたりせる場合は、心で測れ様が、言葉で述べられ様が。殊に其病が、醫師に見離されし折とか、長年月の藥餌も効なき時とか、貪にして

醫藥を得られぬ時等には、哀れは一入深い事と存じます。

此れ等の悲しき人々の侶伴となり、神に祈り佛に念じて祈禱を捧げる、そこに何の迷信がありませんか。現代科學に執して他を見ざる者、鉞力哲學に着して深遠なる妙音に接し得ぬ從輩、瓦石宗教の戸口に立つて廣大無邊の神秘をしらざる小奴等が、祈禱を迷信と言は言へ、我れに本感應妙の利劍あり。慈悲心を離れた豆糟論者の言葉に迷ふなどは、光明界上黙すべからざる一大暗翳であります。吾等は讀者の皆様と共に、この様な、惱める哀れな病者の友となりませう。殊に貧賤なる者、醫藥の効を離れし人などには、また病みたる爲めに反省を起して、宿惡を悔え、後善の誓を立て、一念發起の清淨懺悔の人にして、友無き無聊の床になやむ時などには、更に更に同情つ一心る以て祈願して上げませう。

誰しも人間界に生も得ては、必らず病にかゝる事のあるもの、此世には何の罪悪なくとも、若し我身の兩親先祖等に不品行の人ありし折などには、よく思はぬ病苦に悩むものであります。此様な時に周圍の人々には疎められ、親同胞とも離るゝ様のこともありませうなら、何をたよりとして其日を送りませうか、世皆牢固ならざること水沫泡焰の如しとは、唯に事物の感想や、法門理義の構創の爲めに説かれたものではありません。理想の一年の中にさへ、五風十雨とて雨の日、風の日のあるものを、殊に三惑三毒充滿せる我等や、御身等の日常、前世前身の如何を問はずとも、今日唯今さへなほ了す可きこと難き、過ちないではないでせう。其折の事を思はれたら、敢いて一概に迷信的信仰と、下落立評せしめる事は出来ずまい。

勿論病氣平愈の祈禱よりは廣宣流布の聖願こそ、専ら中心正義の修道には違ひありませんけれど、傍にも許さず、傍々にも取らないのもいかゞでせうか。川に落ちて溺れ様として居る子供を、知らぬ顔に通り過した道學者を、論語讀みの論語しらずと笑ふのも適評なら、妙經受持と叫びながら、なほ惱める衆生を救へも得ず、救はうとする者迄笑ふ様な宗教家も、經文知らずとは笑はれぬでせうか。形式も入りますまい。唯一遍の題目なりとも一心に唱ひ奉ればよいではありませんか。報酬などは出すべきものでもありませんまい。また取るべきものでもありませんまい。純信仰の供養は下根誘發の方便として、時宜によつて受くべきでございませう。涅槃經に、三種の人に施す果報、盡くることなけん。一つには病人、二つには父母、三つには如來なりと説かれたのも、追恨の事情思ふ可きでは、あ

りませんか。而かも昔から、全く事實に於いて、祈禱によつて平愈した病氣は、實に夥しい數であります。近頃これを、いかにも迷信の様に思はれ出したのは、一は正しい信仰の起る大前提として、土臺堅めとして、一分奪の義とも思はれまされど、また天理教や大本教の起る原因とも、なつた事と存じます。一日も早く正中心の宗教道力こゝに現はれて、餘陀の信仰祈禱の力を、消さしむると共に、一切衆生の世間樂の歸依處となつて、やらねばなりません。

昏黄時の花吹雪

例令ば一本の樹の如くであります。日當りもよく、地味も肥え、依地もよく適し、氣候順和に、雨露風雪の度をもあやまたず、切伐蝕害の外敵にも遭はずんば、必らず此樹は壽長く、枝葉繁茂し、根幹太り、蠹々として天を磨するの、大樹と

なることが出来ませう。一切衆生の菩提道樹も亦復この様に、能照の智普く輝きわたたり、無明煩惱の雜草なく、隨喜感應の心田能く調理されて、不退轉の依地よく適し、純信柔輻の氣候順和に、篤行累徳の雨露、持戒忍辱の風雪の度をあやまたず、邪智謗法の外敵の切伐蝕害の恐れ無くんば、決定して此菩提道樹は妙覺果滿の大空に、轟々として聳ゆるに到るでせう。また一切衆生の信順讚仰も亦復同様にて、佛天三寶、古來の聖賢の、擁護の光り隈なくて、無疑能覺の心田肥え、忍難護正の依地揺がず、利他濟民の氣候順和の念調へ、研讀自行の雨露風雪の度時宜にかなへ、三障四魔の切伐蝕害を受けざらば、此信人は必らず、淨土寶臺の望み、忽ちに滿ずる事と存じます。

要するに眞理には、正なく邪なく、生なく滅なく、善惡なく増減なく、住壞な

く、自他なく聖愚なく、淨穢なく、能所なく斷常なく、是非なく虚實なく、大小なく、内外なく迷悟なく、苦樂なく、淺深廣狹の別なく、厚薄遠近の別なく、有無眞偽の差はないのですけれど、大抵の衆生は此言葉を聞いて、驚き怖れて、遂には道を捨て徳を壞して、苦を憂へ厭へつゝ、益々深重無懺の大苦悔に沈淪するのであります。例令て言へば、幼子の驚怖して泣き初めたる様に、叱れども思ひ出しては泣き、笑へども思ひ出しては泣き、すかせども考へ出して泣き、瞞せども忘れられずして泣き、嬉しきにも思ひ起し、悲しきにも思ひ起し、教へても導いても泣き止む事なく、益々大聲を發して泣く様なものであります。故にこれ等を、教へ導かん爲め、假りに其個々の眞理の性のまゝに、正邪をも分ち、善惡をも教へ、内外大小權實迹本種脱とも、順次に直指見眞の正道をお勧めする、様な

次第しだいになるのであります。以上いじやう陳ちんべましました問題は、實じつに絶對ぜつたい海中かいちゆうの一微塵みじんとは言いひ乍なら、轉迷てんめい開悟かいごの一階段かいだんとして、提てい供きやう致いたすのであります。隨分ずんぶん世よの中には如何いかはしい、道理だうりをあやつる俳優はいゆう學者がくしや、俳優はいゆう政治家せいじか、俳優はいゆう教育家きやういかに、俳優はいゆう宗教家しゆきや等らが居ゐりまして、人氣にんきをうけて居ゐりますけれど、道みちを説とき人ひとを導みちびき、世よを治おさめ學がくを教おしへる態度たいどとは、如何いかに割引わりびきしても受け取とれぬのがあります。羊頭やうとう狗肉くにくの人ひとなどではなくても、割合わりあひに眞面目まじめな人々ひとびとでさへ、危あやき不徹底ふてつていを暴露ばくろして怖おそれないのがあります。修羅しゆらが大海たいかいを渡わたるをば是これ難かたしとやせん。嬰兒みどりこの力士りきしを投なげんこと何なんぞたやすしとやせん。慢まんの幢たはほこたほを倒たし、怒いかりの杖つえを捨すて、偏ひとへに一乘ぜうに歸きするは、恐おそれをも知らず恥はぢをも思おもはざらん者ものぢも共ともには、此上このうへもなき難かたき事ことなり。今幸いまさいはひに聖代せいだいに生うまれて信仰しんかうの自由じゆうを享かうく、何なんすれぞ同おなじく信しんを取とるならば、内外ないがい、大小だいしやう、權實こんじつ、本ほん

迹じやくのある中なかに、諸佛しよぶつ出世しゆつせの本意ほんい、衆生成佛しゆじやうじやうぶつの直道ぢきだうの一乘ぢやうをこそ、信しんせずに居たれませうか。因身いんしんの肉團にくだんに果滿くわまんの佛眼ぶつげんを備そなへ、有為うゐの凡膚ほんぶに無為むゐの聖衣しやうえを着きぬれば、三途さんずに恐おそれなく八難はつなんに憚はぢりなし。七方便しちぱうべんの山やまの頂いたゞきに登のぼりて九法界くはうかいの雲くもを拂はらへ、無垢地むこちの園そのに花開はなひらけ、法性ほうしやうの空そらに月明つきあきらかならん。是人ぜにん於佛道ぶつだう決定けつじやう無有疑むうぎの文憑もんたうみあり、唯我ゆゐが一人能為にんのふゐ救護きうごの説疑せつぎひなし。一念信解ねんしんげの功德くふとくは、五波羅密ごはらみつの行ぎやうに超こえ、五十展轉てんでんの隨喜ずゐきは、八十年はちじゆんの布施ふせに勝すぐれたり。頓證菩提とんしやうぼだいの教おしへは、遙はるかかに群典ぐんてんに秀ひいで、顯本遠壽けんほんゑんじゆの説せつは永ながく諸乘しよじやうに絶たえたり。爰こゝを以もつて八歳はちさいの龍女りゆうにょは、大海たいかいより來きたりて經力きやうりきを刹那せつなに示しめし、本化ほんげの上行じやうぎやうは、大地だいちより涌出うじゆつして、佛壽ぶつじゆを久遠くゑんに顯あらはす。言語同斷ごんごどうだんの經王きやうわう、心行所滅しんぎやうしよめつの妙法みやうはふなりと、日蓮上人にちれんしやうにんは印可いんかせられました。上根じやうこんに望のぞめても卑下ひげすべからず。下根げこんを捨すてざるは本懷ほんくわいなり。下根げこんに望のぞめても

僣慢ならざれ。上根も漏るゝ事あり。心をいたさざるが故に。

取りも直さず、老幼婦女をも敬へませう。心あるも心なきも尊びませう。愚狂をも禮拜しませう。またく本石をも敬へませう。白糸や岐路や野百合花や飛鳥川ばかりでなく、果敢なき露の白玉にも、懸樋の水の私語にも、無上の敬意を拂ひませう。されどまた、義にあらずんば、神をも怖れますまい。佛をも怖れますまい。況んや人間界の諸作苦憂、何どてか恐れませうや。驚きませうや。

凡そ其里ゆかしけれども、道絶え縁なきには、通ふ心も疎そかに、其人戀しけれども、憑まず契らぬには待つ思ひも等閑なる様に、彼の月卿雲客に勝れたる、靈山淨土の行きやすきにも未だ行かず、我即是父の柔需の御姿、見奉るべきをも未だ見奉らず、是れ誠に袂を腐らし胸を焦がす歎ならざらんや。

世上の名聞名利に心を入れて、一代不遇に呻吟する人も、少なくはありませぬのに、聖賢の道に進みて、憂苦に到るの人は未だ其例を聞きません。行きにくき道を撰び行き易き道を疎しむるは、足弱き者の習ひにや。眞理に正邪はありませんけれども、過りなき道を示し度く、唯一分の慈悲に催ふされて申すのであります。樂しきには聖訓をなみし、苦しきには聖賢を憾む。あはれ我が儘なる哉。暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも、心をもよほす思ひなり。事にふれ折につけては後世を心につけて、花の春雪の朝も是を思ひ、風さわぎ村雲迷ふ夕には忘るゝ隙なかれ。

心是所になければ、讀めども解れず、氣澄み心静かならざれば、いかにして此微妙を知る事を得られませうか。樂しきにつけ悲しきにつけ、南無妙法蓮華經。

泣くにつけ、笑ふにつけ妙法五字の唱題のみであります。

出づる息は入る息をまたす。何かなる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れ。

何かなる月日ありてか、無一不成佛の御經を持たざらん。昨日が今日になり、去

年の今年となる事も、是れ期する所の餘命にはあらざるをや。

一榮一落是春秋、身をば蟬蟪に譬へても、槿花一日の榮を夢見て、徒らにのみ

月日を送られませうか。また今生この世を措いては、何時を期してか佛にはなる

べき。今の砌りを怠りて、亦いかなる世にかは眞理の道にと向はれませう。

總べて過ぎにし方をかぞへて、年の積もるをば知ると言へども、今行末に老い

て一日片時と誰か命の數に入るべき。臨終已に只今にありとは知りながら、我慢

偏執、名聞利養に着して、妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下にかひなし。

さこそは皆成佛道の御法とは言ひながら、此人争かでか、佛道にももの憂からざるべき。色なき人の袖には、そゝろに月の宿る事かは。

清水には裏も表もなかりけり。實に月は影を惜しまず、唯水の心によつて影の

宛然差別相を示すのであります。信仰の色なき人の研讀の袖に、どうして月影が

宿りませうか。我も亦分かれても會はんとぞ思ふ、戀慕の情は故人に劣る心はな

けれども、如何なる罪のありてか、此の濁末には生を得て、五濁の人を友とせね

ばならぬでせうか。

只先世の業因に任せて營むべし。世間の無常をさとらん事は、眼に遮り耳に滿

てり。雲とやなり雨とやなりけん。昔の人は只名をのみ聞く、露とや消え煙りと

や登りけん。今の友も又見えず、我いつ迄か三笠の雲と思ふべき。

依るべきものは消え失せて、残る一つの月代を暗路を辿る燈火と、たのみてこそ道に進みせせう。行く手は無明の宵けぶり、厚く立ちこめて遠ければ、光りかすけく見ゆれども、唯一すじの道なれば、また心安き次第でございます。

春の花の風に随ひ、秋の紅葉の時雨に染むる、是れ皆ながらへぬ世の中のためしなれば、法華經には世皆牢固ならざる事、水沫泡爛の如しとすゝめたり。

天月淨く照り榮えば、いかならん暗夜も明らかにて、行手は露も不安なく、天地山川、草木國土も明らかに知られて、例令蜉蝣の夕べを待ち、草葉の露の朝日に消ゆる身なりとも、厭はしき心地もなし。生死の大海、波荒れていかに八潮路遠くとも、なほ易々として、渡る事が出来ませう。

嬉こばしい哉。釋尊出世の髻の中の明珠、今度我身に得たる事よ！十方諸佛の

證據としてゐるがせならず、さこそは一切世間多怨難信とは知りながら、争でか一分の疑心を残して、決定爲有疑の佛にならざらんや。

時代の潮流急なれば、支へんとつとむれば流さるゝ事も、逆浪高く吠い恐りて船舫正に危き事も、初發の日より期せる覺悟。眠れる獅子に手をつくれれば大いに吼ゆるも皆存せる所の心得であります。されども、斯かる事に恐れをなして言ひ出でずば、明珠の行衛をいかにせん。南無妙法蓮華經。

過去遠々の苦しみは、徒らにのみ受け來せしが。などか暫くも不變常住の妙因を植えざらん。未來永々の樂しみは數々心を養ふとも、強いてあながちに電光朝露の名利をば貧るべからず。三界無安猶如火宅は如來の教へ、所以諸法如幻如化は菩薩の詞なり。寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし。本覺の栖を離れて、何

事か樂しみなるべき。

いづれ苦樂は凡夫の常、世上の事務にたづさはりても、日々夜々の生業に従ふても、必らず夫々の相應はしい勞苦は、伴ふものを。同じく苦を受け憂を持つならば、眞理の爲めに苦惱を受け、妙法の故に身を捨てずに居られませうか。等しく樂を享けるならば、死の樂をこそ、否とよ苦滅の樂をこそ、否とよ涅槃の樂をこそ、願ひませうではありませんか。

願はくは現世安穩、後生善處の妙法を持つのみこそ、只今世の名聞、後生の弄引なるべけれ、須らく心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、佗をも勸めんのみこそ、今生人界の思ひ出なるべき。

望ましきは、一身の平和、一家の和樂、一郷の融睦、一國の淳和、世界永遠の

安泰清榮であります。眞理の純化であります。法界の統一であります。即ち吹く風枝をならさず、雨壤を碎かず、代は義農の代となりて、今生には不祥の災難を拂へ、長生の術を得ると云ふ様な、現世と離れぬ、競争もあり、善惡もあり、正邪も虚實も存しつゝ、朗々として暗翳なく、悠悠として迫らぬ人生を希ふのであります。斯くて一人より、二人三人と次第に唱へ傳へて、世界同歸の曉を待ち、己身の成佛と離れざる、國土開顯の成佛を得て、眞理融即の妙、正依不離の法體たらしめん事を庶幾ふものであります。

(完)

表紙について

内容と表紙とは、俗人の眼には、或は異様に見ゆるかも知れない。然しこれも亦自然の成り行きである。言はせれば言ふ丈けの論據はある。要するに今の世は男子は賢くすきてか、信仰が一心でない。概して言ふと女人の信仰に確かに動かせない強みがある。法滅盡經の説の様に思ふ。それに女人は法華經をしらなければ決して、美德を輝やかさない。女人成佛の御經と言はれてる理由である。それに念佛宗に尼様が居るのも滑稽なら、基督教で天の愛も聞かえない。女の居らない十萬億土へ往つて何をなさる。天の神様は貴女の戀する様な優男ぢやないよ。愛も許し戀も許される裏には、命をも出せとせまる刃があるぜ！それもほんの犬死にぢやありませんか。

表紙の理由はそんなものであるが、此繪を信州の町田氏に頼んだ所が一月の十四日の御手紙に斯うあつた。一寸した事だがお笑ひ草に誌るして置きます。

拜復 本年は昨年比し、寒氣もゆるやかに暮しよく御座候、御地は如何に候や御母上様始め皆

々様目出度く、御越歳被遊欣喜之れに不過候、當地一同無事暮し居候間御休心相成度候。却説此問御申越の「光明の臺」表紙圖案の儀、甚だ延引申譯無之候。實は御承知の寒行始まり、澤山に毎夜勤行仕り、其準備等にて手間取れ申譯無之候。本年は修行者毎夜二十餘名、非常の盛況にて従つて讀經する所約四百軒有之候。又今般の表紙畫に付き、實に不思議の夢知らせあり、序ながら申上候。夫れは數日前臥床中、廣漠たる天空に一輪の明月懸り一婦人之に對して停立する處にて、之れは始め畫を展覽する氣持にて、遂にはパノラマの如く大になりて、實景と化し候。其狀歴然として腦裡にあり。忽ち目覺め(中略)郵便參り一見せし處、其圖樣殊に堂はなけれども、月に對する婦人を見し夢と符合せるに一同に物語りして、世に間々靈感夢想等の實現せるものと感じ居り候等(下略)云々

湘湖より

坂田律造様

かゝる靈感は決して不思議なものではありませんまい。必らず皆様の中にもかゝる経験のあられた方もあ

りませう。然し其靈感は清淨でしたか。この様に無心でしたか。狐狸も靈感の眞似はします。煩惱も強くなければ夢想はあります。妙法蓮華經の爲めの靈感夢想でなければ決して眞理の感應とは言はれません。

大正十年三月二十二日印刷
大正十年三月二十五日發行

正價金五拾錢

著者權所有

著者兼編輯人

宗教會

右代表者 宗 像 熾

東京府下荏原郡南品川町一丁目六番地

發行人 井 上 善 七

東京府下荏原郡南品川町一丁目六番地

印刷人 坂 田 律 造

東京市牛込區市谷田町一丁目十六番地

印刷所 昭 文 堂 印 刷 部

發行所

東京府下荏原郡南品川一丁目六番地 教令會
(振替口座東京一七七八〇番)

近刊豫告！

誓願の華辨

釋日脫執筆

大正十年二月十六日、末法萬年に縁める、帝都萬世橋の側にて、一般民衆に訴へし辻説法の梗概なり。

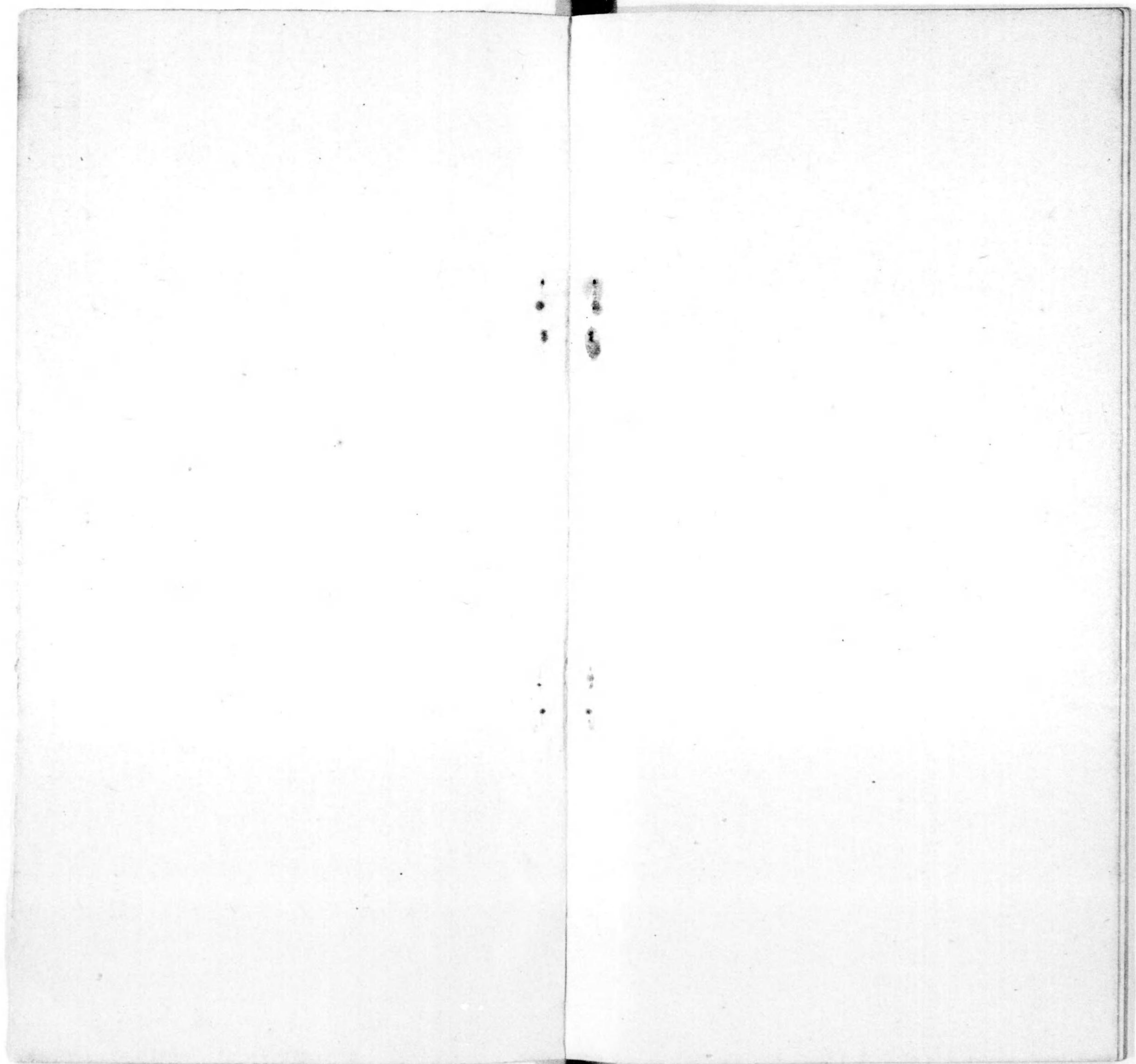
—【次目内容】—

- 一、人間の生命と地球の成滅
 - 二、地球の成滅と宇宙の眞理
 - 三、宇宙の眞理と信仰の歸趣
 - 四、信仰の歸趣と宗教精神
 - 五、一般宗教と妙法蓮華經
 - 六、妙法蓮華經と日蓮聖人
 - 七、日蓮聖人誕生の意義
 - 八、日蓮の遺業と日本の使命
 - 九、日本の使命と世界の平和
 - 十、世界の平和は果して何國の擔保によるか
-
- 十一、國際聯盟と心靈統一
 - 十二、心靈統一は果して何の法によるか
 - 十三、法と國と使命と機根
 - 十四、印度がアラビヤか伊太利か
 - 十五、英米か佛露か獨國か他か
 - 十六、聖語佛法は東土の日本より出づべし
 - 十七、覺めよ日本國民
 - 十八、國家總動員を提唱す
 - 十九、日本國教と世界諫曉の宣傳

東京府荏原郡南品川町一丁目六番地

發行所

教令會



終

